

『天使の羽』

～病床の少女と謎の絵本作家との間に生まれた「8つの童話」の奇跡～

- 1、「絶望」の淵から這い上がる1つ目の童話・・・「ポケットの神様」
- 2、「不満」を解消する2つ目の童話・・・「神様の悟り」
- 3、「葛藤」に打ち克つ3つ目の童話・・・「ネロの住む世界」
- 4、「嫌悪感」を解消する4つ目の童話・・・「小さな魔法使い」
- 5、「拒絶感」を手放す5つ目の童話・・・「つぶやきヘッドフォン」
- 6、「罪悪感」から逃れる6つ目の童話・・・「忘れん坊のまおちゃん」
- 7、「失意」の底から這いあがる7つ目の童話・・・「ありがとうのスタンプ」
- 8、「哀しみ」を癒す8つ目の童話・・・「真夏のマフラー」

原田衛星

1. 再び入院

「どうしてまた入院なんかしなきやいけないのよ！」

美咲は、母親に怒りをぶちまけた。

「あんた、どうせ私を家から追い出したいんでしょ！それなら病院じゃなくて、孤児院にでも入れればいいじゃないの！」

美咲のあまりの剣幕に、それを聞いていた医者も看護師も目を丸くしていた。

お母さんは、いつものことね、という雰囲気を醸し出しながら、美咲の下着などを詰め込んだバックを手荒にベッドに置いた。

「孤児院に入れるならもっと前に入れていたわよ。あんた、もう中学2年生でしょ。あんたみたいな生意気な中学生が入ったら、孤児院の子供たちも可哀想だわ。」

その会話を傍らできいていた父親が二人をなだめる様に言った。

「まあ、まあ、ここは病院なんだから、もう少し声を小さくしようよ。

先生も看護師さんも、驚いているじゃないか。」

美咲はキッとにらみつけて、ふてぶてしい態度で言った。

「おじさんは、黙ってて。」

父親は、気まずい雰囲気を肌で感じながらも笑顔を作って、少し後ずさりした。

「あんた、いい加減にしなさいよ！父親をつかまえて、おじさんとは何よ、
おじさんとは。」

お母さんの顔つきは急に真剣になって、更に声をあらげた。

「久美子さん、いいよ、いいよ。そこは美咲ちゃんの自由だから。」

父親が小さな声で自信なさげにつぶやいた。

「ほんとに、もう、この子は。嫌になる！」

お母さんは、独り言のようにも、でもそれでいて他の人の同情も買いたいような声でつぶやいた。

母と娘、売り言葉に買い言葉。

いつからこのような会話しかできなくなってしまったのだろう。
昔はもう少し労り(いたわり)の言葉が会話に散りばめられていたはずなのに。
そう、パパが死んでしまうまでは。

入院の手続きが済んで病室に戻つてみると、お母さんは美咲にこう言い残して家路についた。

「あんた、先生の言うことをしっかり聞いて治療に専念するのよ。」
どこか神妙さを隠すような、取り繕った母親の笑顔に、美咲はひっかかるものを覚えた。

「うるさい、ばばあ。あんた以外の人が言うことなら何だって聞くわよ。
早く帰って！」
母親の前では一応強がって見せたが、一人ぼっちのこの病室に残されるのがどれだけ悲しいことか。
初めてじゃないこの孤独感が、また再び押し寄せてくるのかと思うと、その日の夜は、なかなか眠りにつくことができなかつた。

2. 心のよりどころ

「美咲ちゃん、久しぶり～」
病室のカーテンをピシャッと開けて、朝日に背を向けた一人の看護師さんが、美咲に話しかけた。
眠い目をこすりながら、目を覚ますと、そこには美咲の唯一の理解者である舞が立っていた。

「舞さん。」
思わず甘えるような声が出た。
舞は、前回美咲が入院した時と同じ、変わらぬ笑顔でそこに立っていた。

「大人になったねえ～」
舞は大げさなくらい目を大きくして言った。

「えーっ、そうかなあ？確かに身長は8cm伸びた。」
美咲はちょっと誇らしげに答えた。
「しかし舞さんは相変わらず綺麗だなあ。」
舞は、美咲の理解者でもあり、あこがれの女性でもあった。

「いやだ～、あれから何年経ったと思ってるの？私はおばさんに一歩一歩近づいているよ。そ
のかわり美咲ちゃんは一歩一歩レディに近づいているのね。」

舞の言葉はいつも美咲を元気づけてくれた。

これらの言葉がまた聞けるのなら、入院も悪いことばかりではないと思った。
それに比べて母親ときたら・・・。

「それで今回はどうしたの？」

舞が先ほどまでのトーンを少し落として聞いてきた。

逆に美咲は、先ほどまでと変わらないトーンを努めてキープした。
先ほどまでの軽い雰囲気を重くしたくなかったから。

「最近ね、朝になるとひどい吐き气があつたり大変だったのよ。

お母さんがあまりに心配して、私を病院に連れて行こうとするから、私は「心配しないで、
ただの「つわり」だから」って言ってやつたんだけどね。お母さんったら目を丸くしてたわ。」
美咲は無邪気に笑った。

舞は美咲の気持ちを察して、明るく聞きかえした。

「頭痛とかなかった？」

「まあ、夜になるとね。頭が痛くて、痛くて目が覚めちゃうの。」
美咲は努めて明るく答えたが、舞の表情が一瞬曇ったのを見逃さなかった。

3. 突然、舞い降りた天使

病院での毎日は退屈だ。

検査の時間をベッドの上で待つだけの毎日。

個室でプライベートが守られている点は満足だったが、自分だけが孤島にでも置いてきぼりにな
ってしまったような不安感がいつも漂っている。

お母さんや父親、弟の優太のお見舞いも、相変わらずお母さんとの口喧嘩で幕を閉じるのがオチ
だった。

反面、何かにおびえる様にそそくさと帰宅の途に就く家族の態度も美咲には気になっていた。

次第に独り言が増えた。

窓の外を眺めては、「あそこにコンビニあったっけ？」などとつぶやくことが増えた。

そして誰かの返答を期待していない自分にも気が付いた。

今日もいつものことながら、窓の外を眺め、下校する子供たちを眺めていた。

ワーウー、キャーキャーと楽しそうに騒がしく歩いている子供たちを見ていると、自分が少しみじめに思えてきた。

「ああ、なんか良いことないかなあ？」

ため息交じりにそうつぶやいた瞬間、美咲の目の前に一羽の鳥がフワーッと舞い降りた。

半開きの窓のサッシが、まるで都合のよい止まり木のようだった。

真っ白なその鳥は、大きな翼を華麗に閉じると、美咲を見つめた。

「え？ なになに？ 意味わかんないんだけど。私が呼んだ？」

鳥は、黙って美咲を見つめていた。

「あなた、ハト？ だよね。どうしたの？ なんか用？ 誰か探してるの？」

自分でも何を言っているのか分からなくなってきた。

美咲の動揺を察してか否か、ハトは「クルッcker」とひと鳴きして、再び青空に飛び去っていった。

「ああ、びっくりした～。」

数秒の空白があり、ふと我に返った美咲がつぶやいた。

独り言というよりも、心から絞り出た安どの声だった。

「ああ、何だったんだ、今のは。幻でも見たのかしら。最近、頭痛もひどくなってきたから、頭がおかしくなっちゃったのかしら。」

少しばかり動搖した心を一気に現実に戻したのは、美咲の足元に落ちていた1枚の羽だった。先ほどのハトが落としていったに違いなかった。

4. 天使の羽

「私、天使に出逢ったのよ。」

翌日、病室を見回りに来た舞に、美咲はすぐにそう告げた。
昨日見た鳥のことを誰かに伝えたくて仕方がなかった。

「美咲ちゃん、死んだわけでもないのにそんな変なこと言わないでよ。
縁起でもない。」

美咲の突然の告白に、一瞬舞はドキッとした。
「それって夢？ほんとに見たの？」
恐る恐るという感じで舞は美咲に聞いてみた。

「これみてよ、舞さん。」
美咲は、ハトが残していった1枚の羽を自慢げに見せた。

「きれいな羽だねえ。「白い」っていうより「純白」って感じ。」
舞は、羽を受け取ると、くるくる回しながら興味深くその羽を眺めた。

「それで、この羽はどうしたの？」

「昨日ね、外を眺めていたら、突然白いハトがその窓に舞い降りてきたの。
普通、ハトって、忙しく首を振つていろんなところを見るじゃない？
でもそのハトはずっと私のことを見つめるのよ。すごく不思議じゃない？」
美咲は興奮気味に話した。

「へえ、この病院にハトが来るだなんて初めて聞いたわ。きっと美咲ちゃんが可愛くて見とれちゃったのかもしれないね。ひょっとして「天使」じゃなくて、「白馬の王子さん」だったりして。」

舞は、ちょっとからかうような口調で言った。

「昨日の夜、ずっと考えてたんだ。きっとあのハトは私の「天使さん」よ。
だって急に私の病室の窓に舞い降りて、何かを探すでもなく、私だけをじっと見つめてたの
よ。
舞さん、早くその「天使の羽」を私に返してちょうだい。」

美咲は少し悪ふざけしているような素振りを見せたが、舞には美咲の本心からの言葉のようにも思えた。

「分かった、分かった。天使の羽、美咲ちゃんに返すわよ。その代り、今日もしその「天使さん」
が再び現れたら、私を呼んでちょうだい。「純白の天使」なのか、「白馬の王子」なのかを見極
めてあげるから！」

5. 怪しいメッセージ

美咲にとって、長い一日だった。
来るのか来ないのか分からない待ち人を待つのは大変だった。

ベッドで本を読んでいても、目線はすぐに窓へ移ってしまう。
窓の方向で何かの気配を感じても、やはり目線は窓へ移ってしまう。
うとうとと眠りにつきそうになると、パッと目が覚めてしまう。
トイレにいくことも、検査に呼ばれるのも、いつもだったら体(てい)のいい「暇つぶし」だった
のに、今日ばかりはこのベッドでひたすら時間をつぶしたいくらいだった。

「ああ、今日はもう来ないのかなあ？」
美咲があきらめる様に独り言をつぶやいたその瞬間、「天使」は空から舞いおりてきた。

「来たっ！」

息をひそめ、白いハトに気づかれないように、ベッドの緊急ボタンをそっと押した。

美咲は動搖していない素振りをみせて、「天使」に話しかけた。
心臓はバクバクと音を鳴らしていた。

「ねえ、今日は何しに来たの？」

ハトは、昨日と同じように美咲を見つめていた。

「私に何か用？」

美咲も、ハトの目をジッと見つめ返した。

「美咲ちゃん、来たの？」

舞が病室に駆け込んできた。

「舞さん、シッ。」

美咲は、目線をハトから外さないまま、人差し指で口を押えた。

ハトはまったくおびえる素振りも見せず、一瞬舞のほうに視線を投げかけたかと思うと、再びその視線を美咲に戻した。

美咲が小さな声でつぶやいた。

「舞さん、どうしたらしいと思う？」

舞も、もっと小さな声で答えた。

「なんか、美咲ちゃんに伝えたいことがあるみたいだね。」

「伝えたいことがあるって言ってもねえ。どうやって話していいのやら・・・。」

なんとも言えない不思議な緊張感が共有されていた。

美咲が打開策を考えあぐねていると、舞が何かに気が付いた。

「あれ？ 美咲ちゃん、ハトの足になにか付いてない？ ほら、右足見てよ。」

よく目を凝らして見ると、舞の言う通り、金具みたいなものが取りつけられていた。

「舞さん、取ってみて。」

「えっ、軽く言うなあ。噛みつかれたらどうするのよ？」

「大丈夫、「天使」だから。」

「な、なによそれ。まだ私は「天使」って認めてないし。」

そう言いながらも、今後の展開が興味津々になってしまった舞は、ゆっくりゆっくり、その真っ白なハトに近づいていった。

「ねえ、天使さん。今から舞さんがあなたのその足についてものを取りのだけれど、どうか驚かないでね。その人、優しいひとだから。」

「なによ、それ。」

ハトは、舞が近づいても、一向に怖がる気配を見せなかった。
そして、そつと足に振れ、取り付けられているものを外している時、舞の手はブルブルと震えていた。
緊張しているようだった。
美咲はそれを見て、思わずツッコミを口にしてしまった。

ハトは、自分の足から取り付けられたものが外されたのを確認すると、フワッと太空に舞い上がっていました。

「はあー」

舞と美咲は同時に息をついた。

「ね？ いたでしょ、天使。」

美咲が言うと、舞は腰が抜けたように床に尻餅をついた。
「天使なのか白馬の王子なのか、私には分からない。ハトよ、ハト。」
少し放心状態の舞が言った。
美咲はその姿が面白くて仕方がなかった。
いつも美しくて、完璧な舞が、こんなヘナチョコな姿を露呈するだなんて。
美咲は、もっと舞が好きになった。

「で、何それ？」

美咲が尋ねた。

舞は、握っていたものを思い出して、掌をゆっくり開いてみた。

「USB よ！」

「USB？」

いまだ謎が謎を呼ぶ展開に、美咲と舞の興味はいよいよ膨れ上がるばかりだった。
「美咲ちゃん、ノートパソコン持ってたよね？」
「うん、そこのバッグに入ってるから、舞さん取ってくれる？」

電源を押し、パソコンを起動している間、二人の緊張は高まった。
まるでサスペンス映画のワンシーンみたいだ。
いよいよ秘密が明かされる時。

「ねえ、どうする？変な死体とかの画像だったら。」
「いや、それよりもエッチな写真だったらどうしよう。」
「ただ、ウイルスを感染させようって悪戯かもよ。」
二人の想像は膨らんだ。

いよいよ、添付されていたファイルを開ける時、二人の鼓動は頂点に達していた。

「舞さん、いくよ！」
「うん！」

開けられたファイルを見て、二人は一瞬固まった。
そこには怪しげな画像などではなく、ワード A4 用紙の上部に、小さな平仮名でこう記されているだけだった。

「きみは、だれ？
あした、おなじじかんにやってきます。」

6. 怪しい文通の始まり

美咲は迷っていた。
「きみは、だれ？あした、おなじじかんにやってきます。」ということは、明らかに相手は返事を待っているということだ。
しかも、ワードに書かれていたそのメッセージの下には、大きく空欄が開けられている。
「次はあなたがそこに書き込んでくれ」とばかりに。

正直なことを言ってしまえば、美咲は返事を書いてみたい気持ちでいっぱいだった。
どうせ自分の人生は、不運続きた。
これ以上、嫌なことが一つや二つ増えたって、別段困りはしない。
そんな懐疑的な理由に加え、これをきっかけに自分の人生がバラ色の転機を迎えるのではないかという期待もあった。

あの真っ白なハトは、私にとって本当に「天使」なのかもしれない。
そうつぶやいて一旦はキーボードに指を置くのだが、
「でも、誰が？いったい何のために？」
この疑問が美咲の頭の中をぐるぐると駆け巡ると、思わず指をすくめてしまうのだった。

「美咲ちゃん、結局どうした？」
舞が病室に入るなり、メッセージのことを聞いてきた。

「なかなか勇気がでなくてね。」
美咲は、決断できない自分に少しいらだっていた。

「誰だってそうよ。いきなり「きみは、だれ？」って聞かれてもねえ。あなたこそ「だれよ」って感じよねえ。」
舞は、美咲を元気づける様に言った。

それを聞いた美咲は目を丸くして、興奮気味に言った。

「それだ、それだ、舞さん！「あなたは、だれよ」って返せばいいんだ。
私、自分のことをどうやって説明しようかとか、その相手が変なだったらどうしようだなんてことばかり考えてたけど、逆に質問するっていうのもありよね。」

「それもそうだ。私、なかなか良いこというじゃない。」
二人は笑った。

美咲は早速、「きみは、だれ？あした、おなじじかんにやってきます。」の下に書き添えた。

「あなたこそ、だれですか？Mより」

ちょっぴり攻撃的な言い回しになったが、相手が年上かも分からないので、敬語を使って、最低限の礼儀は尽くしたつもりだ。
また、自分が全く名乗らないのも失礼かな、とも思い、美咲のイニシャルだけは記載した。

果たして、昨日と全く同じ時刻に美咲の「天使」はやってきた。
そして USB を天使の右足に取り付けると、「確かに預かりました」とばかりに、すぐに翼を力強く広げて飛びだっていった。

これが美咲と「HE」との文通の始まりであった。

7. 意外な差出人

翌日も「天使」は同じ時刻にやってきた。
今度は美咲が USB を「天使」の右足から取り出す番だ。
彼はその間、嫌がる素振りも見せず、美咲の手慣れないその作業をジッと眺めているようであつた。

美咲は自分の不器用さを「天使」に悟られるようでちょっとびり緊張しつつも、なんとか USB を取り外した。

「天使」は自分の役目を果たし終えたことを確認すると、勢いよく飛びだった。

「不思議なハトねえ。」

気になって病室に見回りに来ていた舞が、つぶやいた。

美咲は、いてもたってもいられず、あらかじめ電源を ON にしておいたノートパソコンに USB を差し込んだ。

つづいて舞も、パソコンの画面をのぞき込んだ。
そこにはこう記されていた。

Mさんへ

先の不躾なメッセージをお詫びします。
初回のメッセージを書く時はいつも戸惑います。
どうして僕のような凡人がこのようなお役目を担うようになったかと。

あなたにとってもそうでしょうが、僕にとっても一体どのような人がこのメッセージを受け取るのだろうかと考えると、恐ろしい気持ちになるのです。

そして、これからあなたと僕との間で生まれるであろう「魂の展開」に恐れおののくのです。

さて早速、あなたが抱いているであろう疑問についてお答えします。

① 伝書鳩について

あなたが会った伝書鳩は、僕の大切なお友達です。

このお友達は、いつも「特別な事情を抱えた子供」を見つけて来では、僕にその子供の存在をお知らせにやってきます。

ただ、このお友達が、どこでどのようにしてその子供を見つけてきたのかは、僕には分かりません。

このお友達は、いつも僕の目の前に突然現れ、彼が選んできた子供と僕との「魂の展開」を求めてくるのです。

② なぜ平仮名だけのメッセージを送ったのか？

僕には、そのお友達が見つけてきた「特別な事情を抱えた子供」が何歳くらいかを知る由もないのです。

時には、小学校低学年の子供であることもあります。

だから誰でも読めるように、平仮名だけのメッセージを書いたのです。

③ 「ぼく」はいったい誰なのか？

まったく名乗るほどのものではありません。

何か特別な能力があるわけでもありません。

人の上に立つような人間でもありません。

ただ、ちょっとだけ人と違うのは、いい年齢の大人なのに「白いハト」を「お友達」と呼んでしまうことと、「絵本作家」であるということくらいです。

④ これから始まること

今回は、あなたが選ばれたようですね。

「選ばれた」と言われても困るでしょうが、僕の友達があなたの目の前に現れたのは、偶然ではありません。

だから「選ばれた」と申し上げるのです。

あなたは、小学校高学年か、中学生くらいでしょう。

「あなたこそ、だれですか？」というパンチの効いた（笑）返信と、お名前のイニシャルを書き添えたところをみれば分かります。

これからあなたと僕が始めることは、「魂の展開」です。

「魂の展開」と言っても、変わった宗教でも、難行でもありませんので、ご安心ください。

具体的には、僕があなたのためだけに「8つの童話」を書きます。

「童話」といっても、どのような物語にするのかは、まだ決まっていません。

「くまさん」や「りすさん」が登場することもあるでしょうし、人間や神様が出てくることもあるかと思います。

あなたにしていただきたいのは、一つだけ。

その童話の「お題」を僕に与えてほしいのです。

基本的にどんな「お題」でもいっこうに構わないのですが、一つだけ条件があります。

それは、「あなたの人生に沿うものである」ということです。

あなたが普段考えていることや、あなたの関心ごと、悩みなどがそれにあたります。

ぼくは、あなたのお顔もお名前も知りません。

あなたがどこにいるのか、そしてどんな生活をしているのかを知りません。

そして、ぼくとあなたがこの先お会いすることもありません。

だから安心して、この変な絵本作家にお題を与えてほしいのです。

僕は「HE」と言います。

「HE(ヒー)」と呼んでくれても、「HE(エハイ)」と呼んでくれても構いません。

あなたにお任せします。

それでは。

HE より

美咲はゆっくりパソコンの電源を切った。

しばらく美咲と舞との空間を重い沈黙が支配した。

二人ともこの怪しい展開に動搖しているようだった。

長い間の沈黙を破ったのは、舞だった。

「HEって…。英語で「彼」ってことでしょ？変な名前よねえ…。

美咲ちゃん、気にするのやめよう。こんな変わった話、無かったことにしようよ。このお話は、おしまい、おしまい。」

美咲はしばらく黙って考えあぐねている様子だったが、重い口を開いた。

「舞さん、私、手紙書いてみるわ。」

「えーっ！」

舞は、思いがけない美咲の決断に大きな声をあげた。

「美咲ちゃん、こんな変な話、やめたほうがいいよ。聞いたことないわよ、

「僕は絵本作家」ですとか、「白いハトと友達です」って言う大人。さらによ、「魂の展開」ってなによ。絶対、やばいって！」

舞の必死の引き留めにも関わらず、美咲の心はすでに固まっていた。

「舞さん、私、書いてみるわ。」

8. 「絶望」から立ち直る1つ目の童話・・・「ポケットの神様」

HEさんへ

「ずいぶんと変わった大人もいるものだ。」

それがあなたのメッセージを読んだ時の私の正直な感想です。

白いハトのことを「お友達」と言ってみたり、「魂の展開」だなんて、会ったこともない見ず知らずの子供に書くメッセージでしょうか？

それも大の大人が、それも大真面目に。

その中でも一番納得できなかったこと、それはHEさんが私のことを「選ばれた」と言ったことです。

あなたは私のことを知らなすぎるのです。

一度見れば分かるはずです。

私は「選ばれた」人間ではなく、「見放された」人間なのです。

子供のころから何をやっても上手くいくものが一つもありません。
人に胸を張って自慢できるものが一つもありません。
人から羨ましがられたり、誰かから褒められるようなこともありません。
誰かから求められることもありません。
それどころか、母親からも見放され、唯一の理解者であった父親はすでに他界してしまいました。
更に幼いころから身体も弱く、入退院を何度か繰り返しています。
そして、実は今も私は病院にいます。

世の中どこか間違っていますか？
私が一体どんな悪いことをしたというのですか？
どうしてこんなにひどい仕打ちを受けなければならないのですか？
それでも私が「選ばれた」とあなたははどういうのでしょうか？

こんな私とは反対に、実に楽に生きている人たちもいます。（私の偏見かもしれませんが…。）
裕福な家庭に生まれ、身体的な欠陥もなく、また見た目も良く、勉強も運動もそつなくこなす人たち…。
毎日を笑顔で過ごす人たち…。
私とは違う人たち…。

どうして私はこんなにも「不幸」続きの人生を歩んでいるのでしょうか？
どうやったら「幸せ」な人生を歩むことができるのでしょうか？

Mより

このメッセージを送ってから数日後、「天使」は再び美咲の眼前に現れた。
ここ数日、いつもの時間になると窓の外を眺めては「天使」がやってくるのを待ちわびていた。

美咲にとっては、それはそれは長い長い時間に感じられた。
ひょっとして自分は騙されているのでは、という気持ちに触れたこともあった。
「天使」の身に何かよからぬことが起きたのでは、という不安もよぎった。
しかし、「天使」は再び美咲のもとに舞い降りたのだった。

「ああ、良かった。心配したよ。」

USB を足から取り外しながら、「天使」の顔を懐かしげに見つめた。
たった数日会っていなかっただけなのに、こんなにも寂しさがこみ上げるなんて。
本当に不思議な気持ちだった。

美咲は、すぐにパソコンを立ち上げると、USB を差し込んだ。

Mさんへ

誰もが「幸せな人生」を歩みたいと願っています。
でも世の中の多くの人たちが苦しんでいる理由は、
「人はどうしたら幸せになれるのか？」
その方法を知らないからなのだと思います。
あなたもその一人だということを知りました。
あなたに「幸せのしくみ」を伝えようと、このお話を書きました。

第1話 「ポケットの神様」のお話

「まお、ポケットに手を入れて歩かないの。危ないでしょ。」

まおちゃんはいつもお母さんに叱られてしまいます。
ズボンのポケットって手がおさまるのにちょうどいい場所にあるんだよね。
ポケットを作った人って天才じゃないかしら。
そんなことを考えながらも一応お母さんの言いつけに従ってみます。

「まお、ポケットに手を入れて走らないの。転んだら顔をごっちんこするわよ。」

まおちゃんはまたお母さんに叱られてしまいました。
だって最近やっと保育園が楽しくなってきたのよ。
教室が見えたら自然と走っちゃうんだからしょうがないじゃない。
そんなことを考えながらも今度もお母さんの言いつけに従いました。

ある日のこと、お母さんが真剣な顔をして言いました。

「ねえ、まお。ポケットには神様がいるのよ。あなたが手を入れていると、神様は居心地が悪くて出て行っちゃうのよ。」

それを聞いたまおちゃんは驚いてお母さんに尋ねました。

「え？ ジャア、わたし保育園に行くときハンカチをポケットに入れるのやめるわ。だって神様いなくなっちゃうもん。」

お母さんは困り顔で黙ってしまいました。

するとその会話を聞いていたお父さんが笑いながら言いました。

「ハンカチは神様のベッドになるからいいんじゃないかなあ。たいそう居心地が良くなって、まおのポケットの中にずっと居てくれるかもよ。」

まおちゃんは、納得した様子でした。

次の日、弟のセイヤがハンカチをグチャグチャに丸めてポケットに入れるのを見たまおちゃん。

「セイヤ、だめでしょ。ハンカチをちゃんと畳んであげないと神様が寝にくいでしょ。神様いなくなっちゃうよ。」

弟のセイヤはそれを聞いて泣いてしました。

まおちゃんは、弟のポケットからハンカチを取り出すと、それを丁寧に畳んであげました。

おしまい

子供たちは、大好きなものはなんでもポケットに入れてしまいます。

道端で拾ったきれいな石や形の変なドングリ、時には虫の死骸なども入れては、大切に持っています。

いったんポケットに入れると、なんだか自分だけの大切な宝物ができた気がして、何度も何度もポケットに手を入れては、その存在を指先で確認して楽しんでいます。

洗濯するときに、それらの「お宝」が大量にポケットから出てきて、親は困ってしまいます。親にとっては「ガラクタ」（というより気持ち悪いものばかり）なので、「捨てていい？」って聞くと、かたくなに拒否します。

子供たちにとって「ポケット」とは、大好きなものを入れる「宝箱」なのかもしれません。

反対に、成長していくにつれ、その「ポケット」が「宝箱」から「ゴミ箱」に変わっていきます。これはとても興味深い現象です。

大人は、「嫌いなもの」や「嫌（いや）なもの」をポケットの中に押し込んでしまいます。「がまん」とか、「忍耐」とか、「体裁」とか、「責任」「妥協」などなど・・・。そんな重荷をポケットに詰め込んで、生きてています。

歳を重ねるにつれて、それらの「大切じゃないもの（ほしくないもの）」は不思議なくらいどんどん増えて、ポケットの中に重荷は増えていくばかりです。

「なぜ私は不幸なのか？」

「どうしたら幸せになれるのか？」

そんなことを感じながら毎日を過ごしているのなら、ポケットの中身を一新してみたらどうでしょうか？

その時に大事なことは、たったひとつ。

「あなたにとって大切なものの」をポケットにいれるようにする！ということ。

「あなたの家族にとって大切なものの」ではありません。

「あなたの世間体のために大切なものの」でもありません。

あなたが生きる上で、本当に大切にしているものを。

「幸せな人」というのは、ポケットの中に「楽しい・嬉しい」を詰め込む人。

「不幸な人」というのは、ポケットの中に「心配・不安・不満」を詰め込む人。

ポケットを「宝箱」に変えるのが「幸せな人」

ポケットを「ゴミ箱」に変えるのが「不幸な人」

さあ、今日からあなたはポケットにどんなものを入れるのでしょうか？

絵本作家からのメッセージその1

人生を彩るものは、あなたがポケットに入れるもので決まる！

「心の中心」を定める（選ぶ）！

HE より

美咲は静かにパソコンを閉じた。

静かに目を閉じると、これまで自分がポケットに詰め込んできたものに思いを巡らせた。

9. 「不満」を解消する2つ目の童話・・・「神様の悟り」

HE さんへ

1つ目の童話「ポケットの神様」について、私なりによくよく考えてみました。そして自分なりに解釈しました。

童話を読み終えた時は、「ああ、ポケットに入れるものに気をつけなさいね」というお話だと思っていたのですが、色々と考えていくうちにもう一つのメッセージが隠されているのだということに気が付きました。

それは、何をポケットに入れるのかを選べるのは自分だということでした。

つまり、人生の「幸」「不幸」を決定するのは、ポケットに入れるもので決まるし、更に、何を入れるのかを選ぶのは自分自身だということですね。

自分自身の幸せは、自分自身の「選択」にゆだねられているということですね。

少しだけ「幸せのしくみ」が分かったような気がしました。

ただ、頭ではそのように理解できるのですが、どうしてもまだ腑に落ちない点があるのです。

それは、やっぱり世の中は不公平にできているのではないかということです。

私のように、身体は弱く、自慢できる才能もとりたててなく、家庭環境も良いとは言えない人間がいる一方、健康で、容姿端麗、裕福な家庭に育つ人もいる。
どう選択しようとも、私とその人のポケットの中身は変わってくるのではないでしょか？
このような生まれ持った、本人のがんばりはどうしようもできない「差」は、やはり不公平だと思います。
納得できません。

どうして私ばかりに嫌なことが起こるのでしょうか？

Mより

Mさんへ

「どうして私には嫌なことばかり起こるのだろう」
実のことを言うと、僕も子供のころ、そんなことばかり考えていました。
でも、あることを知ったとき、それが「大きな勘違い」であることに気が付いてしまったのです。
今回のお話は、そんなお話です。

第2話「神様の悟り」のお話

ある日のこと。
神様は人間たちが暮らす世界を明るく照らしてあげようと思い、彼らに「光」を与えました。
するとどうでしょう。
彼らは自分の背後に映る影を見ては嘆き悲しむばかりでした。
神様の意志に反して、人間は「光」を「闇」に変えてしまったのでした。

次に神様は「仲間」をつくらせてあげようと思い、「言葉」を与えました。
するとどうでしょう。
彼らはその言葉をつかって互いにののしり合って争うばかりでした。
神様の意志に反して、人間は「言葉」を「武器」に変えてしまったのでした。

次に神様は、人間世界を温かい気持ちでみたしてあげようと思い「感謝」を与えました。
するとどうでしょう。
彼らはその優しさを利用して互いにだまし合うばかりでした。

人間は「感謝」を「悪知恵」に変えてしまったのでした。

願いとは裏腹に、人間界は神様の意志を変換してしまうのでした。

神様はそれが残念でなりませんでした。

最後に神様は人間に「悲劇」を与えました。

すると驚くべきことが起こりました。

今度はその「悲劇」をエネルギーにして立ち上がったのです。

強い信念と勇気を育んで。

そして人々は手に手を取り始めたのです。

それを目の当たりにしたのです。

そのとき神様はこう悟りました。

人間は「悲劇」を「希望」に変えられる尊い存在なのだと。

おしまい

どうも僕たちは「変換ミス」をしてしまう生き物のようです。

「光」を「闇」に変え、

「言葉」を「武器」とし、

「感謝」を「悪知恵」に変えてしまうようです。

僕たちは、日常でもそんな変換ミスをおかしていいでしょうか？

親の「深い愛情」を「ただの小言」だと変換していいでしょうか？

友達の「厚い友情」を「おせっかい」だと変換していいでしょうか？

他人の「思いやり」を「押しつけ」だと変換していいでしょうか？

もし毎日が「不幸」なことばかりで覆われていると感じているならば、

こうした「変換ミス」を起こしていないか、僕たちはもう一度よくチェックしてみる必要があるかもしれません。

この世の中は「豊か」で「温かく」、「愛情に満ち溢れている」ものです。

でも、もし「貧しく」て「冷たく」、「実に不公平」だとあなたの目に映っているのならば、「見方」がちょっとだけピントズレを起こしているかもしれません。

あなたが生きている世界は、あなたが眺めている世界そのものです。
(ちょっぴり禅問答っぽいですかね。へへへ。)

絵本作家からのメッセージその2

どのように眺めるかで、あなたの世界は変わる！

「見方（心の在り方）」に目を配る！

HE より

私が「不幸」なのは、私の「変換ミス」？
美咲にとっては、完全に否定したいフレーズであった。
嫌なことは、どう変換しても嫌なことじゃないかしら・・・。
でも、否定しきれない何かが、彼女の心の奥底に潜んでいた。

10. 「葛藤」に打ち克つ3つ目の童話・・・「ネロの住む世界」

HE さんへ

「どうも僕たちは「変換ミス」をしてしまう生き物のようです。」
という HE さんのメッセージに私の心は揺れました。
確かに思い当る点が、いくつか見受けられました。
ものごとに対する「私の眺め方」に問題があったのだと思い知らされたのでした。
でも、やっぱり納得のいかない点もありました。
ですから、私の心はまだ揺れています。

私たちの身の回りは「捉え（とらえ）どころのない問題」であふれかえっています。
思い通りにいかないこと。
意志や能力ではどうにもならないこと。
やりたいことがあるのに、何かや、誰かに邪魔されること。
達成したいことがあるのに、十分な時間が与えられていないこと。

私たちのほとんどがこの「捉えどころのない問題」に日常を支配されています。そしてイライラしてみたり、時には絶望感さえ味わって生きていかなければなりません。

一体、どうして私たちはこのような困難に直面しなければならないのでしょうか？

Mより

Mさんへ

あなたが歩む人生の道のりには、うれしいこと、楽しいことも起きるし、逆に悲しいこと、苦しいこともあります。

これは誰の人生にも平等に起こる「人生のスパイス」です。

なにもかもが上手くいかない、自分の思うようにことが運ばない。

そんな瞬間を迎える時が必ずやって来ます。

あなたが言う「捉えどころのない問題」とは一体何なのか？

なぜそのような困難に直面するのか？

その「理由」を一緒に考えてみましょう。

第3話 「ネロの住む世界」のお話

ネロは「想像の世界」に住んでいます。ここは頭の中で考えたことがすべて実現する世界です。ほしいものを想像すると即座に目の前に現れます。

お腹がすいたネロは大好きなカレーライスを想像しました。

すると、あっという間に地平線の彼方まで届きそうなくらいの大きなお皿に盛られた、山盛りのカレーライスが目の前に現れました。

「よし、今日も大好きなカレーライスを食べるとしようか。どこから食べようかなあ。」

カレーライスを目の前に興奮気味に食べ始めました。

しばらくして特大のスプーンを脇に置いて、ネロは神様に話しかけました。

「ねえ神様、ここ想像の世界は何でも手に入って楽しいのだけど、ちょっとびり退屈なんだ。

僕はほかの世界も見てみたいよ。」

すると神様の声が聞こえてきました。

「よし分かった。それではお前に「制限の世界」を見せてあげよう。」

神様が「えいっ」と叫ぶと、「想像の世界」の中に「制限の世界」が入りこんできました。すると先ほどまで地平線の彼方まで伸びていた大きなお皿が、直径 20 cm ほどのプレートに変わりました。

大好きなカレーライスがあつというまに小さくなってしまい、ネロはがっかりしました。でも少しだけたべたところで、すっかりお腹がいっぱいになってしまったのです。

「お腹がいっぱいになるなんて初めてのことだ。そうか、「制限の世界」には「限界」というものがあるんだな。」

すっかり楽しくなったネロは更に神様にお願いをしました。

「ねえ神様、ずっと一人食べても楽しくないよ。なんか他の世界はないのかい？」

するとまた神様の声がしてきました。

「よし、今度は「関わり合いの世界」を見せよう。」

神様がまた「えいっ」と叫ぶと、「想像の世界」と「制限の世界」の中に「関わり合いの世界」が入りこんできました。

するとネロの目の前にカレーライスを食べている可愛らしい女の子が現れたのです。彼女はネロを見て微笑みました。

「君もカレーライスが好きなのかい？」

ネロが尋ねると女の子はニコリと笑いました。

「どうだい、僕が想像したカレーライスの味は最高だろ？」

女の子は微笑みながらうなずきました。

「なんだろう、このドキドキした気持ちは。そうか「関わり合いの世界」では「感情」というものが生まれるんだな。」

すっかり楽しくなったネロは更に神様にお願いをしました。

「神様のおかげで僕はすっかり楽しくなってきました。ついでにもう少し他の世界も見せ

ておくれよ。」

するとまた神様の声がしてきました。

「それでは「時間の世界」を見せるとしよう。」

またまた神様が「えいっ」と叫ぶと、「想像の世界」「制限の世界」と「関わり合いの世界」の中に「時間の世界」が入りこんできました。

するとどうでしょう。

目の前の少女がみるみるうちに美しい大人の女性に変貌を遂げたかと思うと、今度はあっという間に老婆に姿を変えてしまいました。

また、先ほどまで緑色だった木々の葉もみるみるうちに青々と茂ったかと思うと、次には赤く変色し、さらに最後には枯れ果ててしまいました。

ネロは目前で起こった変貌を目にして、すっかり驚きました。

「そうか、「時間の世界」では「変化」というものがあるんだな。」

ネロはすっかり興奮していました。

「想像の世界」では、頭で思い描いた通りのことが全て実現します。

この世界では「可能性」を楽しむことができるのです。

そして「可能性」はネロに他の世界を見てみたいという「夢」を与えました。

そして他の3つの世界を掛け合わせることで更に楽しみが何十倍、いや何百倍にも広がっていったのです。

「制限の世界」では「限界」を楽しみました。

限界を知ると、それを越えてみたいという「意志」がうまれたのです。

そして「関わり合いの世界」では、他人と過ごすことで生じる「感情」を堪能しました。感情を知ると「幸福感」がうまれたのです。

「時間の世界」では「変化」を目になりました。

変化を知ると変わりゆくものへの「慈しみ」がうまれましたのです。

最後に、ネロは「想像の世界」「制限の世界」「関わり合いの世界」「時間の世界」、この4つの世界をひとまとめにした世界で生きていきたいと思いました。

そして神様にお願いしたのです。

「神様、どうかこのすべての世界を僕にお与えください。」

すると天の神様からまた「えいっ」という声がしたかと思うと、
ネロは「地球」という宇宙一美しい星に旅立っていきました。

おしまい

「想像の世界」

「制限の世界」

「関わり合いの世界」

「時間の世界」

一つ一つの世界は本当に素晴らしいものであるのです。

なぜなら、それらの世界はあなたに成長という輝かしいチャンスを与えてくれるからです。

ただ、とても残念なことに、僕たちはこれらの世界を「自らの成長を拒む言い訳」に使用して生きてています。

- ・「できません。私は病気なのだから。」(制限の世界)
- ・「あの人さえいなければ、もっと楽しいのに。」(関わり合いの世界)
- ・「もう年齢が年齢だから。」(時間の世界)

こうした「言い訳」が僕たちの日常にまかり通っているのです。

これがあなたの言う「捉えどころのない問題」の正体なのです。

つまり、「捉えどころない問題」というのは、実は、僕たちの心が創り出している産物なのです。

では、僕たちはどうしたらこの「捉えどころのない問題」から解放されるのでしょうか？
その問題を解決するポイントとして、ネロが一番初めに暮らしていた世界を思い出してほしいのです。

そう、「想像の世界」ですね。

実は「想像の世界」は、他の3つの世界の土台となる世界です。

「想像の世界」が、「制限」「関わり合い」「時間」という3つの世界を創り出しているのです。
でも、人間は自身の「想像」で創り出した「制限」「関わり合い」「時間」という3つの世界に束縛されるという、とても「不可思議なスパイラル」にはまり込み、そこから抜け出せないままで

います。

では、そこから解放されるにはどうしたらいいのでしょうか？

答えはとても簡単です。

「想像のスイッチ」を変えてみることです。

「捉えどころのない問題」は、あなたの想像が創り出したのです。

だから、あなたの想像が変われば、事態は急変するのです。

「想像のスイッチ」を変える簡単な方法を1つ紹介しておきますね。

それは、「それだからこそ」を使ってみることです。

「私は病気だ。それだからこそ、人の痛みを感じることができるのだ。」

「嫌いなあの人いる。それだからこそ、私は何かを学ぶことができる。」

「もう年齢が年齢だから。それだからこそ、私が得たものを他の人と分かち合うことができる。」

絵本作家からのメッセージその3

あなたの目の前で起こることすべてに、あなたの「想像」が関わっている！

「世の中のしくみ」を知る！

11. 「嫌悪感」を解消する4つ目の童話・・・「小さな魔法使い」

最近、美咲には気にかかることがあった。

それは異常に目がかすむことだった。

「HE」の童話を何度も読み返すことが、もはや美咲の日課となっていたが、パソコンの文字が読みにくく、何度も何度も目をこすっては画面に目を近づける。

そして読みにくくて苛立ちを覚えながら、パソコンの電源を切る。

そんな変化に気が付きながらも、美咲はそのことを誰に言うでもなく毎日を変わりないように過ごしていた。

そのことをお母さんやお医者さんに話したら、なにかもっと恐ろしいことを知るはめになる！

そんな恐怖心が彼女の心をむしばんでいた。

「美咲、着替え持ってきたから、ここに置いとくわよ。」

お母さんが病室にやってきた。

美咲は返事もせず、ただ黙ってうなずいた。

「なにより、返事くらいしなさいよ。あんたには感謝ってものがないよね。」

お母さんのいつもの反応に、今度はうなづくのもやめた。

二人の間に流れる不穏な雰囲気は、お互に慣れっこになっていた。

もう何年、こんな感じが続いているんだろう。

美咲は、長いトンネルの先に一筋の光さえ見いだせない関係に嫌気がさしていた。

「こんな女、死んでしまえばいいのに。」

心から願う自分に、もう一人の自分が驚いていた。

HEさんへ

お久しぶりです。

ちょっとご無沙汰してて、すみません。

最近、少しだけ体調が良くなくて・・・。

でも、心配はいりませんのでご安心を。

「ネロの住む世界」楽しく読ませてもらいました。

私が抱えている「捉えどころのない問題」が3つの世界に整理されること、

また、その問題が自分自身の「想像」によって束縛されているものだということ。すごく、すごくよく分かりました。

それにしても人間って面白いものですね。

自らが創り出したものに、苦しめられているって。

そこで、今日の私からの「お題」は、「関わり合いの世界」に関する問題です。

「想像のスイッチ」を使っても、どうしても解決できない問題なのです。

それは・・・私のお母さんのこと。

私とお母さんの関係は最悪です。

会えば必ずケンカになります。

会うとなんだか腹がたつてくるのです。

そして気が付けば、「ばばあ」とか自分でも信じられないくらい、ひどい言葉を投げつけています。

そして毎回、あとで反省するんです。

私は親に向かってなんということを言ってしまったのだろう、って。

でも、やっぱり次に会うときも同じことが繰り返されます。

顔を見ると、ムカつき以上の何かを覚えます。

憎悪に似たものです。

私とお母さんの関係は、昔から最悪だったわけではありません。

昔は優しいお母さんだったのです。

それが一変したのは、パパが亡くなつてから。

パパは優しくて、面白くて、家族を大切にしてくれる、素晴らしい人でした。

でも突然、彼は逝ってしまいました。

私たちを残して・・・。

あの日から母は変わりました。

私が宿題をやらないでいると、大声で怒るし、食べ物を残すと怒鳴ったりしました。

小さい頃はそんな母が怖くて、怖くて、彼女の機嫌ばかりをうかがっていました。

母の表情を見てはビクビクして過ごしていました。

当時の私にとって母に逆らうことは、最大のタブーでした。

でも、自分の成長に伴つて、そんな母に疑問を抱くようになりました。

なんでこの人は、こんなにも怒るのだろうか。

怒られる私ではなくて、この人がおかしいんだと。

そんな時、私にとって大きな事件が起きたのです。

母が、「おじさん」と結婚したのです。

私はその時、この母の裏切りが許せませんでした。

母は、パパを捨てたのです。
私の気持ちを踏みにじったのです。
そして私はその時、母の「弱さ」を知ったのです。

母が弱い存在だと知ったとき、もう母が怖くなくなっていました。
そして、母は私の「憎しみの的」となったのです。
あんなにも私たちを大切してくれた「パパ」を簡単に裏切り、あんなにも私を怒鳴りつけた母が、「おじさん」にすり寄っていく姿は、気持ちが悪くて見てられませんでした。

私は彼女を許せません。
彼女を許しません。

彼女には彼女の苦しみや悩みがあることは分かります。
彼女には彼女の人生があることを理解しています。
でもやっぱり私はあいつを許せません。

Mより

Mさんへ

大切な人に裏切られたり、傷つけられて、気分を悪くすることはあるものです。
相手に悪意があろうが、なかろうが、どうしても許せないですね。
よく分かります。
でも、そのような時、あなたはどのように反応したらいいのでしょうか？
僕に妙案があります！

第4話「小さな魔法使い」のお話

セイヤくんは3歳の普通の男の子。
おむつはまだ外れないし、ママがいないとたまらなく不安になったりします。
そんなどこにでもいるこの男の子は、実を言うと「小さな魔法使い」なのです。

どんな魔法を使うかって？
その魔法とは…こんな呪文を唱えるのです。

「ま、いっか！（ああ、いいか！）」

ある日の保育園でのできごとです。

セイヤくんは使っているおもちゃを友達に取り上げられてしまいました。

「僕が楽しく遊んでいるのに！」

「ちょっと貸してねって言えばいいのに！」

セイヤくんの頭にいろんな理由が浮かんでちょっぴり腹が立ちました。

でも、よく見れば自分よりも1つ年下の男の子でした。

こんなこそ時、セイヤくんは例の魔法を使うのです。

人差し指で頭をボリボリ…、そして一言。

「ま、いっか！（まあ、いいいか！）」

すると不思議なことに気持ちがすっかり楽になりました。

そして他のおもちゃで遊ぶことにしました。

夕方になるとお迎えがきました。

隣のクラスのねえね（お姉ちゃん）がセイヤ君を迎えてくれました。

二人仲良く手をつないで門のところまで行くと、パパがお迎えに来ています。

ねえねはセイヤくんを置き去りにして、パパのもとへ目散に走っていきました。

「えー、ママじゃないの？ ママの柔らかいホッペでハグしてほしかったのに！」

「ママと一杯お話ししたかったのに！」

ママのお迎えではないことを知って、いろんな理由が浮かんで寂しくなりました。

こんな時こそ、セイヤくんは例の魔法を使うのです。

人差し指で頭をボリボリ…、そして一言。

「ま、いっか！」

すると、また気持ちがすっかり楽になりました。

そしてセイヤ君もパパのもとへ走っていきました。

3人でお家に帰りました。

セイヤくんは昨日録画してもらった「仮面ライダー」を見せてとパパにおねだり。

それを聞いたねえねが言いました。

「だめ、だめ。ドラえもん見るの！」

セイヤくんは負けじとねえねに立ち向かいました。

「僕が仮面ライダー見るの！」

するとねえねの会心の一撃。

「ドラえもん見るって今朝パパと約束したもんね！」

その会話を聞いていたパパが困り果てて言いました。

「よし、じゃあ、ドラえもんから見るとしようか？」

「もう、いつもねえねが先になるんだから！」

「パパはねえねに弱いんだから！」

セイヤくんの頭にいろんな理由が浮かんで悔しくなりました。

こんな時こそ、セイヤくんは例の魔法を使うのです。

人差し指で頭をボリボリ…、そして一言。

「ま、いっか！」

またまた、あっという間に気持ちがすっかり楽になりました。

ねえねがテレビを見ている間、ひとりでパズルをやることにしました。

セイヤくんはパズルが大好きです。

でも、完成品が好きなのです。

組み立てる作業はあまり得意ではないのです。

出だしは順調なのに、いつも決まったところで分からなくなってしまいます。

いつもなら頼りのねえねが助けてくれるけど、今日は絶対頼まないからね。

一生懸命ひとりで頑張ってみたのですが、でもやっぱりダメでした。

「ま、いっか！」

セイヤくんは例の魔法を使ってパズルを途中でやめてしまいました。

それをかたわらで見ていたパパが言いました。

「セイヤ、いつも「ま、いっか！」ばかりじゃダメだよ。完成するまで頑張りなさい！」
いつもよりちょっぴり大きな声でした。

でも、セイヤくんも男の子、仮面ライダーが敵と戦う時と同じくらいの強い眼力でパパをにらみ返しました。

男と男のにらみ合い。

ちょっとした緊張感が走りました。

ねえねもテレビから目を離し、この一触即発の成り行きを見守っています。

しばらくの沈黙を破ったのはセイヤ君の魔法の一言でした。

「ま、いっか！」

そして人差し指で頭をボリボリボリ。

それを見たパパとねえねは思わず吹き出して(笑って)しました。

そして先ほどまで冷たい雰囲気が充満していたお部屋が急に明るくなりました。
まるで魔法にでもかかったような変わりようでした。
セイヤくんはやっぱり「小さな魔法使い」なのでした。

おしまい

嫌なことや腹がたつことが起こったとき、どのように対応すれば良いのでしょうか？

一般的に考えられるのは、次の二つの方法です。

一つ目は、「戦う」ということ。

嫌なことがあったとき、それを克服するために戦ってみる。

誰かからとても嫌なことを言われたり、嫌なことをされたとき、「勇気」を出して言い返してみる。戦ってみる。

すると相手の反応は、次のどれかでしょう。

- ①更に嫌なことをしてくる
- ②無視する
- ③やめる

その相手は、①～③のいずれかを選び、事態はその次への展開へと発展していくのです。

つまり、あなたが「戦う」というカードを使うと、その結果をあなたはコントロールすることができないということです。

相手の「出かた」を待たなければなりません。

そこで二つ目の方法です。

それは「受け入れてしまう」ということです。

嫌なことがあったとき、それを受け入れてみるのです。

相手からとても嫌なことを言われたり、嫌なことをされたとき、気にせず、反応せず、「まあ、いっか！」って受け入れる。

すると、この「嫌なこと」はそこで「終わる」のです。

つまり、あなたが「受け入れる」というカードを使うと、その結果をあなた自身がコントロールする（終わらせる）ことができるということです。

「正義のために戦う」「誰かのために戦う」というのは、素晴らしいのだけれど、それによって更なる憎悪や悲劇を生み出すことがあります。

それならば、僕たちは「受け入れる」を選んでみたらどうだろうか？と思うのです。

そう、「まあ、いっか！」って。

するとこの世に存在する「怒り」「悲しみ」「憤り」「妬み」というマイナスの感情や現象が、あなたのところですべてストップすることができるのではないでしょうか？

あなたは「正義のヒーロー（ヒロイン）」だ！

「戦う」だけが、ヒーロー（ヒロイン）じゃない！

「不幸の連鎖を断つ」、これがニューヒーロー（ヒロイン）だ！

この怪しい絵本作家は、そう思うのです。

絵本作家からのメッセージその4

あなたが打つ「一手」が過去を清算し、未来を創造する！

「信頼」される！

12. 「**拒絶感**」から解放される5つ目の童話・・・「つぶやきヘッドフォン」

HEさんへ

「小さな魔法使い」のお話をありがとうございました。
とてもホッコリするお話の中に、問題の核心に迫るものがありました。
「ま、いつか」って受け入れる・・・。
うーん、これを母に対してできるかどうかは、正直難しいかもしません。

ただ、母に対する憎悪は、私の「彼女のことを受け入れない心」が創り出しているのだと、よくわかりました。

私が母に憎しみを抱くようになったのは、「母の態度」、「母の再婚」、「母の裏切り」という事実ではなく、それを受け入れない私の「拒否の心」だったのですね。
「手品の種明かし」をしてもらったみたいで、スッキリしました。

さて、今日の「お題」です。
それは、私と母の再婚相手「おじさん」との距離感についてです。

おじさんは、一般的にみたらとても良い人です。
よくもあんな厄介な母と結婚したものだと感心します。

でも、あんな母だけど、「パパ」と「おじさん」を選んだのだから、彼女の男性を見る目は確かだと思います。
逆に、二人の立派な男性（パパとおじさん）に愛されるのだから、母にもなにかいいところがあるのかもしれません。
私にはさっぱり分かりませんが。（笑）

もし、「おじさん」が美咲のお家（うち）の「隣のおじさん」だったら、もっと楽しい関係を築くことができたのに、と思うことがあります。
それくらい優しくていい人なのです。

でも、おじさんが「パパ」の代わりとなると話は別なのです。
あの人が私の父親という看板を背負った時、私と彼の関係はとても複雑なものになってしまうのです。

「おじさん」は基本的に無口ですから、私たち子供のことをどのように考えているのかを知るすべはありません。

私と弟を大切にしようとする素振りもありますが、それは母を奪うための作戦なのかもしれません。

心の中で私と弟のことを「やっかいなのが付いてきた」と思っているのかもしれません。
だから私も彼を「父親」だと認めることができません。

私はこの先、どうしたらしいのでしょうか？

Mより

Mさんへ

「僕は大切にされているのだろうか？」「私は愛されているのだろうか？」

それは誰もが一度は考えてしまう疑問です。

生きることが楽しくない人たちは、この疑いの中で生きることを選択した人たちです。

では、どうしたら、この疑いが晴れるのでしょうか？

その答えを、今日のお話から見つけてもらえたなら嬉しいです。

第5話 「つぶやきヘッドフォン」のお話

「もう、パパなんて大嫌いだ」

ヤマトは黙って部屋に入っていくパパの背中に向かって叫びました。

パパはそんなヤマトの怒鳴り声に耳も傾けずに眠たい目をこすりながら静かに部屋のドアを閉めました。

バツシャッ

朝のまぶしい光が部屋に入るのをさえぎるためにカーテンが勢いよく締められた音が響きます。

「ヤマト、しかたないでしょ。」

ママがヤマトの怒りを静めようと優しく言いました。

「パパはねえ、ヤマトが眠っている夜の間、ずっと働いていたんだから」

まだ怒りが治まらないヤマトは隣の部屋で寝ているパパに聞こえるくらい大きな声で言いました。

「だって、パパ、僕と一緒にいる時間が全くないんだもん。毎朝疲れて帰ってきて、全然遊んでくれないんだもん。」

そう言って、ほっぺたを大きく膨らませました。

「しかたががないでしょう。パパは「夜勤」明けで疲れているんだから。今から眠らなきゃ、今晚仕事へ行けないのよ」

「知らない。僕はパパもヤキンも大嫌いだ！」

そう言い放つとヤマトは家を飛び出してしまいました。

勢いよく家を出てきたのはいいものの、全く行くあてもありません。

途方に暮れてブラブラあるいはいると小さなウサギ小屋の前を通りかかりました。

ピョン太とピョン吉親子がいます。

「おお、ヤマトくんじゃないか。今日は随分早くからのお出ましたねえ。」

お父さんウサギのピョン太が言いました。

言い忘れましたが、ヤマトは動物とお話ができる不思議な男の子です。

でもそのことについて誰にも話したことがありません。

大好きなママだってヤマトが動物とお話しできることを知らないのです。

「あ、おはよう、ピョン太さんとピョン吉くん。考え方をしていたから二人に挨拶するのを忘れそうになっちゃった」

それを聞いたピョン吉が言いました。

「ヤマト君、今日は随分浮かない顔をしているねえ。なにか嫌なことでもあったのかい？」

「うん。君たち親子はいつも一緒にいられていいねえ。たくさんお話がきて、たくさん遊べるんでしょう？」

この小さなウサギ小屋の中ですっと一緒にいられるピョン太・ピョン吉親子がうらやましくて仕方が無いのです。

ヤマトは今朝の出来事を二人に話しました。そして話が終わるとピョン吉くんがお父さんに言いました。

「お父さん、あれをヤマトくんに貸してあげようよ。」

「そうだねえ、「つぶやきヘッドフォン」だね。」

「つぶやきヘッドフォン？」

ヤマトは怪訝な顔をしました。

するとピョン吉くんはウサギの耳の形をしたヘッドフォンを取り出しました。

「そう、この「つぶやきヘッドフォン」を耳に付けると、どんなに遠く離れていても、

一番聞きたい人の「つぶやき声」が聞こえてくるんだよ。

ヤマト君もパパのつぶやきを聞いてみるといいよ。」

その日の夜、ヤマトは「つぶやきヘッドフォン」をつけてベッドにもぐりこみました。ママに見つからないようにそっと。

夜の静寂の中で働いているパパのつぶやきに耳を傾けました。

「これでよしっと。うまくできたぞ。」

「朝までに仕上げなくっちゃ。」

「ああ、また止まっちゃったよ。なんとかしなくっちゃ。」

パパのつぶやき声を聞いていると、一生懸命働いている姿が目に浮かんできます。

「パパはこんな夜遅くに大変だなあ。」

ヤマトも思わずつぶやきました。

次から次へとヤマトの耳にパパのつぶやきが届いてきました。

「ああ、疲れたなあ。」

「朝までに時間がないぞ。なんとか頑張ろう。」

「朝出社する仲間たちのためにも進めておかないと。」

それらのつぶやきをベットの中で聞いていると、パパが隣で一緒に寝てくれているような錯覚を

覚えました。それがまたヤマトにはとてもうれしいことでした。

その安堵感に包まれて、深い眠りに落ちていこうとするヤマトの耳に、パパのこんなつぶやきが飛び込んできました。

「ああ、それにしても眠たいなあ。ヤマトは暖かくして寝てるかなあ。パジャマがメク
レあがってお腹が出てなきゃいいがなあ。
夜勤の間は一緒に遊んであげる時間がなくて悪いなあ。今朝もブンブン怒ってたもの。
でも、パパはお仕事頑張るんだ！これもヤマト、ママの幸せのためなんだ。きっといつか分
かってくれるさ。よし、顔を洗ってもうひと頑張りだ！」

ヤマトは今朝の出来事を後悔していました。

「パパなんて大嫌い」だと言ってしまったことを。

パジャマの上着のすそをズボンの中に入れ直すと、スーッと眠りに落ちていきました。

(次の日の朝)

「ただいま！」

パパが帰ってきました。

ヤマトは勢いよくベットから飛び起きると、玄関に走って行きました。

「おかえり！」

パパはヤマトを抱き上げると満面の笑顔で言いました。

「おっ、今日はちゃんとパジャマの上着がズボンのなかに入ってるじゃないか。」

「うん、いつもパパに言われているからね。」

「おかえりなさい。」

ママが台所から二人の声を聞きつけてやってきました。そしてヤマトのあまりの変貌ぶりにパパと目を合わせて首をかしげました。

「さあ、お風呂いれてあるからどうぞ。その後みんなで朝ご飯を食べましょうね。」

「パパ、お風呂どうぞ」

ヤマトも機嫌よく言いました。

パパは満面の笑みを浮かべながら抱っこしていたヤマトをヨイショとおろすと、そのまま脱衣所に向かいました。そして振り向くとヤマトにこう言いました。

「おい、そのウサギの耳のヘッドフォン、なかなか似合ってるぞ。」

バタン

お風呂の戸が静かに閉まりました。

つぶやきヘッドフォンにパパの鼻歌が聞こえてきました。

それはパパが上機嫌の時にいつも決まって唄う歌でした。

おしまい

人は「本音」をなかなか口にできません。（このことを心に留めてください）

恥ずかしさのあまり、本音を思わず飲み込んでしまうことがあります。

本当のことを言ったら相手を傷つけてしまうのではと考えるときもあります。

「つぶやきヘッドフォン」は大切な相手にチューニングを合わせて、その人の「本音」を聴き出すことができます。

すると、相手がいかに自分のことを大切にしてくれていたかが分かります。

ただ、口に出したり、態度で表現していなかっただけなのだと分かります。

そう、僕たちは人から大切にされているのにも関わらず、そのことに気が付いていないだけなのです。

軽んじられている、自分は誰からも愛されていない、などと思っているのであれば、それはただただ、相手の感情を理解していないだけなのかもしれません。

僕は人様から大切にされている。

私はあの人から愛されている。

そのことを知ることができたら、人は安堵という光のなかで生きてゆけるに違いない。

この世の中に「つぶやきヘッドフォン」があったら、どれだけ多くの人たちが幸せに気が付くのだろう。

そんなことを真剣に考えたりします。

でも、こうした特別なヘッドフォンを身に着けるより、もっと簡単に幸せを共有できる方法があります。

それは、お互いに勇気を振り絞って「感謝」の気持ちを伝えてみることです。

ちょっとの勇気を振り絞ればできるはず。

「勇気」とはそういう時にこそ使うものなのでしょう。

絵本作家からのメッセージその5

あなたが誰かの声に耳を傾けた時、あなたの声は届くだろう！

「他者を理解」する

トントン

「いやあ、美咲ちゃん、調子はどうだい？」

病室を訪れたのは「おじさん」だった。

「仕事帰りにちょっと寄ってみようと思ってね。」

汚れた作業着の小脇に真っ赤なバラの花を抱えていた。

「美咲ちゃん、バラが好きだって聞いたからさあ。」

いつもよりも明らかに声のトーンが高い。

思えば「おじさん」が一人きりで美咲の病室を訪ねたのは初めてだった。

そうか、それで緊張しているんだ。

「お母さんは、おじさんが病院に来ること知ってるの？」

「いや、言うと「私も行く」って言うからさ。それよりこのバラどこに置こうかな？ちゃんと水差しだって買ってきましたんだ。」

おじさんは、慣れない手つきで水差しに水を入れ、バラを丁寧に入れた。

その指先が少し震えていた。

美咲がそれに気づいたのを悟ると、おじさんは恥ずかしそうに言った。

「俺、女人にバラなんて渡したことがないから。人生初のバラのプレゼントが娘になるとは。」
言った後に、おじさんはハッとした表情を浮かべた。

「ごめんね、変な意味で言ったんじゃないよ。」

おじさんのあわてっぴりに、美咲は思わず笑ってしまった。

その顔を見て、おじさんも安堵の表情を浮かべた。

「ところで具合はどうだい？」

おじさんは少し硬い表情になって尋ねた。

「うん、まあ。」

入院したころよりも状況が悪くなっていることは明らかだった。

目のかすみだけでなく、身体がずっと重いのだ。

ただ、それが病気の進行によるものなのか、治療の副作用からなのかはよく分からなかった。

最近は、ベッドで横になっていることが日常になっている。

「おじさん・・」

「何だい？」

「こんなこと聞いていいかわからないんだけど、おじさんが育った家庭ってどんな感じだった？」

美咲は、戸籍上は父親になる「おじさん」のことを何も知らなかった。

いや、知ることを拒否していたというのが正直なところだった。

おじさんのことを知って、親近感がわいてしまうことが怖かったのだ。

母親だけでなく、自分までもが「お父さん」を裏切ることになると思っていたから。

おじさんはちょっと驚いた様子を浮かべた。

そして過去を懐かしげに語り始めた。

「実は、うちのおやじってひどい人でね。典型的なダメおやじだった。

毎晩お酒を飲んでは、母親を殴るんだ。

「こんなまずいもんを俺に食わすのか！」ってね。

「誰のお陰で飯が食てるんだ！」ってね。

僕は、それが怖くて、怖くて。

子供の僕はおふくろを助けてあげたかったんだけど・・・。

自分もあれほどまでに殴られるのかと思うと、身体が動かないんだ。

ただそこに座って、目を閉じるんだ。

そして殴られているおふくろの姿を見ないことだけが、僕のできる精一杯の抵抗だったんだよ。情けない息子だろ？」

笑みを浮かべて話す「おじさん」の瞳に悲しみが宿っていた。

「みんなそうだよ。子供は目の前にある悲しみを乗り越える術を持っていない。「見ないふり」をするので精いっぱいだよ。」

美咲は「おじさん」をなぐさめるように言った。

「サラリーマンだったんだけどね、会社では認められない人だった。
いつかおやじと出かけた時、偶然おやじの上司とその家族にバッタリ出会
ったんだけど、おやじがペコペコ何度も何度も頭を下げるんだ。
額が地面についちゃうくらいで、横にいた上司の子供も冷笑してたよ。
僕と同じくらいの年の男の子だったけど、僕と目が合うと、ニヤッとしたんだ。
なんだか「お前の親父情けないやつだなあ」って言われてる気がして。
恥ずかしさと、口惜しさで胸がいっぱいだった。
そして思ったんだよ。
僕もおふくろもこんな情けない男に、支配されているのか！って。」

いつも通り物腰柔らかく語るおじさんの表情に、憎しみらしき陰りが見えた。

美咲は黙って聞いていた。

「結局、弱い人だったんだなあ。
彼にとって、世間は恐怖の対象だったんだねえ。そして安どの場所となるはずの家庭が、スト
レス発散の場所になってたんだね。
親父は、とても弱い存在で、唯一自分が強さを誇示できる場所が家庭だった。
きっと僕のおふくろは、そのことを良くわかっていたんだ。
殴られても、蹴られても、罵声を浴びせかけられても、親父の心のバランスを取ってあげるこ
とが、おふくろにとっての精一杯の愛情だった。
りっぱな母親だったよ。」

おじさんの瞳にはうっすらと涙が染み渡っていた。

でも、どことなく懐かしげに語る表情に笑みがこぼれていた。

「それでおじさんのお父さんとお母さんは、今どうしてるの？」
美咲は、尋ねていいものかと考えあぐねたが、思い切って聴いてみた。

「僕が中学生の時に、突然おやじが蒸発したんだ。
「ちょっと出かけてくる」って出かけたまま、帰ってこなかった。」

その数日後、警察から電話がかかってきて・・・。

おふくろは何やら失踪した理由を聞いたみたいだけど、僕にはなにも話さなかった。

僕も尋ねなかつたけどね。

だって、おやじがいない家庭のほうが心地よかつたから。」

「で、お母さんは今も？」

美咲はおじさん的心の痛みをかいくぐるように、静かに尋ねた。

「僕が高校生の時に亡くなつたよ。

おやじが失踪してから、たつた数年だった。

おふくろが安どの日々を送れたのは。」

おじさんの瞳から一滴（ひとしづく）の涙がこぼれた。

美咲は、この時初めて目にした。

大人が涙する姿を。

大人って泣かないものだと思っていたのに。

パパが死んだ時だって、お母さんは涙を見せなかつた。

私はあんなにも泣いたのに。

あの時から、大人って泣かないものだと思ってた。

おじさんは、思わずこぼれた一滴の涙を急いで服の袖でふき取つた。

そして、もう一度笑顔を取り繕うと、先ほどよりも大きな声で話した。

今度は美咲の目をじっと見つめて。

「だからさ、僕が君のお母さんと結婚した時、この家族を絶対に幸せにするんだ！って誓つたんだ。

そして、君たちとて自慢のお父さんになれるように頑張ろうとも思ったよ。

でも、ごめんね。僕も自分の父親と同じ無力な男だったよ。あはは。」

おじさんは力なく笑つた。

美咲は何も言えなかつた。

しばらく沈黙が続いた。

「あっ、そろそろ帰らなくちゃね。」

おじさんは白々しく腕時計を見ると、あわてる素振りを見せた。

「美咲ちゃん、おじさんの話を聞いてくれてありがと。楽しかったよ。」

美咲は何も言わず、うなずいた。

正直、何と言つていいのか分からなかつた。

これまでおじさんにとってきた多くの失礼な態度を詫びたい気持ちで一杯だつた。

でも、今更なんと言えばいいのだろうか。

言葉にできない・・・。

おじさんは面会用のパイプ椅子から腰をあげると、病室のドアに向かつた。

おじさんが行つてしまふ！

そう思つた時、美咲の口から瞬時にこんな言葉がこぼれ出た。

「おじさん、お母さんを幸せにしてあげてね。きっとおじさんにしかできないことだから。」

おじさんは、ドアのノブに手をかけたまま、振り向いた。

「分かった。約束するよ。必ず幸せにする！娘との初めての約束だ。」

おじさんは、いつもの優しい笑顔で美咲の病室を後についた。

13. 「罪悪感」から逃れる6つの童話・・・「忘れん坊のまおちゃん」

美咲の体調は日に日に悪くなつていつた。

最近は、極端に食欲は無くなり、しばしば、おう吐もあつた。

お姉さんと慕う看護師の舞との会話でも、ろれつが回りにくくなつてゐることにも気が付いていた。

でも、美咲はそれを舞に気づかれないように、少しずつおしゃべりのスピードを下げているのだった。

「美咲ちゃんには、ボーイフレンドっていないの？」

ベッドで横になつてゐる美咲に舞が尋ねた。

「何よ、急に。」

美咲は驚いたように舞の顔を見た。

最近、病床でふさぎ込みがちな美咲を気遣っているのだと、気が付いた。

美咲は、舞の質問に乗ってみることにした。

「いないわよ、そんな人。」

氷が解けていくように、こわばっていた自分の表情が緩んでいくのが分かった。

「じゃあ、好きな人は？」

舞が悪ふざけをしているような顔で、更にたずねた。

美咲の反応を楽しんでいるようだった。

「いないよ～。うちの男子って野蛮なヤツばかりで。」

美咲はそう答えると、脳裏にふと1人の男子の顔が浮かんだ。

伊藤駿だった。

HEさんへ

しばらくお返事が書けずにいてすみません。

こここのところだいぶ体調がすぐれないのです。

これから書くメッセージも誤字脱字、変換ミスがたくさん出てしまうかもしれません、許してください。

これから、これまで誰にも話してこなかったことをHEさんには伝えます。

お母さんにも、学校の先生にも、また大好きな看護師さん（舞さんって言います）にさえ、話してこなかったことです。

実は、私は学校でイジメられていたのです。

それもかなりひどかった。

どんなイジメかを具体的に書くのはあまりにも辛すぎるので、書きません。

でも、私はクラス全員からのイジメの対象になっていました。

私を助けてくれる人は誰一人いませんでした。

だから私には友達が一人もいませんでした。

クラスにもう一人私と同じ境遇、つまりイジメられっ子がいました。

伊藤駿くんっていいます。

彼は吃音がひどく、それを笑いものにされていました。

可愛そうだったのは、彼は男の子だったから、時々男子たちに殴られたりすることもありました。

今日、ふと思い出したことがあります。

それは、教室で私がある男の子とふいにぶつかってしまった時のことです。

その男の子は、サッカー部で体格もよく、クラスでも人気者でした。

私とぶつかったのを見た周りの生徒たちが彼を囁(はや)し立てました。

「うわー、美咲とぶつかってやんの。みさ菌（美咲菌）がうつったかもよ。」

その男の子は、みんなにそう言われたのがよっぽど恥かしかったのでしょう。

私に対して彼はこう言ったのです。

「お前、気を付けて歩けよ！今度俺にぶつかったら、お前をサッカーボールみたいに蹴り飛ばしてやるからな！」

みんなはそれを聞いて笑っていました。

もちろん私にとっては屈辱的な言葉でしたが、ひたすらうつむいて黙っているしかありませんでした。

その時、大声、いや奇声をあげてその男の子のグループに飛びかかっていった人がいました。

それが駿くんだったのです。

男の子のグループは一瞬何が起こったのか理解できない様子でしたが、駿くんが何故ぶつかってきたのかが分かると、今度は一斉に反撃にでました。

「反撃」、というより「一方的」というほうが正しい表現でしょう。

駿くんは、その男の子たちにボコボコに殴られてしまいました。

一通り駿くんが殴られると、今度はみんな蜘蛛の子を散らすように、その輪から離れていくました。

その場に残ったのは、私と倒れている駿くんだけ。

でも、私はあろうことか、何もできず、黙って彼をおいて席に戻ってしまったのです。

なんて声をかけるべきなのか、駿くんに謝るべきなのか、それともお礼をいすべきなのか、私にはどうしていいのかが分からなかったのです。

今、私は恥ずかしい気持ちで一杯です。

私を守ろうと戦ってくれた駿くんを、私は見捨てたのです。

彼は私のために「必死」になってくれたのに、私は「恥ずかしさ」でその場を立ち去ったのです。

こんな情けない私にお話を願いします。

Mより

Mさんへ

人は自分の「安全」を第一に考えます。

人は自分の「幸福」を第一に考えます。

それは決して恥ずかしいことではないと、僕は思います。

それが僕たち人間の本質なのですから。

でも、自分以外の「誰かを守りたい」「誰かを幸せにしたい！」という尊い気持ちを持つのも、

また僕たち人間でもあります。

もしMさんが「守りたい誰か」「幸せにしたい誰か」を見つけ出した時、

あなたはその人に何をしてあげたら良いのでしょうか？

次の話を読んでみてください。

第6話 「忘れん坊のまおちゃん」のお話

「もう、本当にまおは忘れん坊なんだから」

まおちゃんはいつもこう言ってお母さんにしかられてしまいます。

おとといは保育園に到着してハンカチを忘れたのに気が付きました。出掛けにお母さんに言われたのに、弟のセイヤとの喧嘩に夢中になってしまったのです。

お母さんはまおちゃんの目線に合うように腰を下ろして言いました。

「出かけるときにあれだけ言ったでしょ。」

そしてこう言われてしまふのでした。

「もう、本当にまおは忘れん坊なんだから」

昨晚はおもちゃのお片付けができなくて叱られてしまいました。お母さんに言われていたのに、他の遊びに夢中になってしまったのです。

またもやお母さんはまおちゃんの目線に合うように腰を下ろして言いました。

「寝る前にあれだけ言ったでしょ。」

そしてまたこう言われてしまうのでした。

「もう、本当にまおは忘れん坊なんだから。」

今朝、出掛けにお母さんはまおちゃんを深く抱きしめてこう言いました。

「まお、お母さんいつも怒ってばかりでごめんね。でもどんな時もあなたのが大好きだからね。」

それを聞いたまおちゃんは、満面の笑顔でこう答えました。

「ママ、それ、毎朝まおに言ってちょうだい。だってまおは忘れん坊なんだから。」

そしてお母さんのほっぺにチュッとキスしました。

おしまい

もし誰かを幸せにしたいと思ったら、どんなことをしたらいいのでしょうか？

それがこのお話のポイントです。

相手がほしがるものプレゼントしてあげたらいいのでしょうか？

それとも困っていたら助けてあげるのがいいのでしょうか？

僕は、どれも正しいと思います。

大切な人に何かをしてあげたいと思うことは、ものすごく尊いことだと思うのです。

多くの国を旅して一つ分かったことがあります。

万国共通、誰もが一番ほしがっているものは何かということ。

それは・・・「愛のある言葉」です。

人の心が乾ききってしまう時、一番不足している栄養素は「愛のある言葉」です。

「愛のある言葉」は人の心に潤いを与え、ジワーッとその人の心に染み入っていきます。

そしてその潤いは、その人を元気に、たくましくしていくのです。

僕たちは「愛のある言葉」を語っているだろうか？

「あなたのため」と称して、相手の心の潤いを奪うような批判的な言葉を使っていないだろうか？

あなたが誰かを「幸せにしたい！」と思った時、その人に「愛のある言葉」を贈ってあげてください。

相手はその言葉に心癒され、あなたを生涯大切にしてくれるに違いありません。

絵本作家からのメッセージその6

あなたからの最高の贈り物は「愛のある言葉」！

「協力関係」を築く！

「美咲、着替え持ってきたわよ。」

お母さんはいつも通りノックもせず、急に病室に入ってきた。

美咲はこの少しばかりエチケットを欠いた母親の行動にいつも苛立ちを覚えるが、今日はなぜだかいつも不機嫌なお母さんの表情が明るい。

いや、明るいというよりもニヤニヤしている。

「じゃあ、着替えはここに置いとくわね。お母さん忙しいから帰るわよ。ああ、それとあんたのお友達が来てるわよ。」

「え？」

病室の空いたドアの向こうに一人の少年が立っていた。

伊藤駿だった。

お母さんは、「ごゆっくり」と少年に声をかけると、そそくさと病室を後にした。

「は、は、入っていいかな？」

「ど、どうぞ。」

美咲もつられてどもってしまった。

「きょ、今日、が、学校休みだったから。」

「あ、そうか。今日は日曜なんだね。ずっと病院にいると毎日が日曜みないなものだから、曜日が分からなくなっちゃうんだ。」

「ぐ、ぐ、具合は・・・ど、どう？」

「うん、今日は大丈夫だよ。」

先ほどまで気分は最悪だった。薬のせいか、何をやっても気持ちが悪かった。

でも、いまは努めて明るくふるまつた。

家族以外では初めての訪問者だったから。

正直、うれしかった。

「学校はどう？」

今度は美咲が尋ねた。

「う、うん。い、いつもと変わらない」

いつもと変わらずイジメられているのかと思うと、美咲の心は痛んだ。

多感な10代の二人の会話は、始めこそどことなくぎこちなかつたが、だんだんと盛り上がりを見せていった。

駿の家族構成や、どうして彼が吃音になったかというような個人的なことまで話しあは広がつた。

駿の笑顔を初めて見たと美咲は思った。

彼の笑顔を見たのはクラスの中で私だけだ。と思ったら、なんだかとても貴重な経験のように思えた。

この時間がずっと続いてくれたらいいのに。

今日だけは、部屋に舞さんが入ってきませんように。

そんなことを考えていた。

「そういえば・・・。」

美咲は切り出した。

「え？」

駿が一瞬身構えたのが分かつた。

「あの時、ごめんね。私のせいで男子たちに殴られちゃって。」

ああ、やっぱり。駿はそんな表情を浮かべ、とても恥ずかしそうにしていた。

「本当に、ごめんなさい。あの時、私まであの場を立ち去っちゃって。」

「も、もう、いいよ。そ、その話は。」

美咲は思い切ってきいてみた。

「どうしてあんなことをしたの？」

しばらく沈黙が続いた。

駿は言うべきかどうか迷っているようだった。

そして静かに口を開いた。

「き、君の最大のピンチだったから。プロプライドが傷つけられるという・・・。」

私のプライドのために彼は戦ってくれたのか！負けることが分かっていても！

美咲は、小柄でか細い少年の中に眠っている強さを見た。

「そ、そろそろ、か、か、帰らなきや。」

少年は恥ずかしげに立ち上がった。

美咲の目にはその姿がたくましく映っていた。

美咲は立ち去ろうとする少年の背中にむかってつぶやいた。

「あなたは、私のたったひとりの友達だよ。たったひとりの・・・。」

少年は、立ち止まりもせず、そして振り向きもせず、こう言い残した。

「僕もそう思っている。」

そのはっきりとした力強い少年の言葉に、涙がにじんでいた。

14. 「失意」の底から這いあがる6つの童話・・・「ありがとうのスタンプ」

ある朝、驚きの中で目が覚めた。

美咲は急いで緊急ブザーを鳴らした。

舞さんが来てくれるといいのだけれど・・・

「美咲ちゃん、どうした？」

舞が少し慌てながら病室に入ってきた。

「ああ、舞さんで良かった。」

美咲はほっと肩をなでおろした。

「どうしたの？」

一見なんの変りもない美咲の姿に違和感を感じながら、舞は尋ねた。

「私、やっちやったみたい。」

「え？」

「おねしょ・・・」

美咲は、布団で顔を隠した。

舞さんならきっと笑い飛ばしてくれるはず・・・

そう思っていた美咲の心とは裏腹に、舞は複雑な表情を浮かべていた。

「私も片づけ手伝うから。舞さん、ほんとにごめんね。」

無理にベッドから身体を起こそうとしたが、うまく手足が動かないことに気が付いた。

舞は、ふと我に返ったように、いつも通りの明るい笑顔で答えた。

「ううん、別に片づけが嫌だってことじゃないからね。あなたは心配しなくていいのよ。」

じゃあ、さっきの深刻な顔はなに？

美咲は不吉な何かを感じていた。

HEさんへ

HEさんはお変わりないですか？

元気にお仕事されていますか？

私はとうとう手足がうまく動かなくなってしましました。

今まで言わなかったのだけど、私の病気は確実に進行しているみたいです。

だから、今日は舞さんに代筆をお願いしています。

しゃべるだけで書かなくていいなんて、こんな楽なことはありませんね。(笑)

最近、「私はいったい何のために生まれてきたんだろう？」って考えることがよくあります。何の特技もなく、人の役にたつ何かもなく、結局、病気になって人に迷惑だけをかけている。私の人生はそんな感じです。

「ひょっとして、私は人に迷惑をかけるために生まれてきたの？」

「きっと私は疫病神じゃないかしら・・・。」

「私の存在がどれだけの人にとて迷惑なのかしら・・・。」

こんな言葉たちが私自信を責め続けます。

最近の私は、ずっとこんな感じです。

「自信」をつけるお話を願いします。

Mより

Mさんへ

人は、知らず知らずのうちに「自信」を失っていることがあります。

それはあなただけではないのです。

「私はいったい何者なのだ」とか「何のために生まれたのだろう」という深い疑問が頭をよぎり、みんな自分の道や居場所を失っていきます。

でも、僕は知っています。

僕たちは「たった一つのこと」が欠け始めると、自信を失っていくということを。

今日のお話はちょっと長いから、体力的に厳しかったら、舞さんに読んでもらってください。

第7話 「ありがとうのスタンプ」のお話

怠け者のミツバチがいました。

このミツバチはいつも蜂の巣の一番奥の部屋に引きこもっていました。

お母さんバチは大変困ってしまいました。

「外に出たら気持ちがいいわよ」と誘ってみると「外は危険なことばかりだよ」と答えます。
「お友達と遊んできたら」と提案してみると「友達なんてメンドクサイことばかりだよ」と答えます。

いよいよお手上げのお母さんバチは、長老バチに相談することにしました。

長老バチは急け者のミツバチの部屋を訪れました。
自分を説得に来たことは百も承知のミツバチは大変警戒していました。
すると長老バチから思いもよらないお話があったのです。

「ちょっと頼みたいことがあるのじゃ。このカードとスタンプを渡すとしよう。」
急け者のミツバチは一枚のカードを受け取りました。

「カードには5つの空欄があるだろう。そこにこのスタンプを押して、空欄を埋めてきてほしいのじゃよ。」

なまけものミツバチが受け取ったスタンプには「ありがとう」と刻印されていました。

「ありがとう？」

「そうじゃ、これは「ありがとうのスタンプ」と言ってな、1つだけルールがあるのだ。
「スタンプは決して自分で押してはならぬ」ということ。自分以外の誰かに押してもらうのだ。」

急け者のミツバチはすっかり面白くなっていました。
そして久しぶりに蜂の巣から飛び出すことにしたのです。
誰かに会わなければ「ありがとうのスタンプ」は押してもらえないと思ったからです。

蜂の巣から外に飛び出すと、すぐにカメくんがミツバチを呼び止みました。
「そこのハチくん、ちょっとちょっと。」
ミツバチが地上に降り立つと、カメくんはこんなお願いをしました。
「ちょっと待ち合わせ場所に遅れそうなんだ。あと20分ほどで到着すると伝えてきてくれないかい？君の羽ならひとつ飛びだろう。」

大変困っているカメくんを見捨てるわけにもいかず、ミツバチは待ち合わせ場所へ向かうこととしました。

「分かったよ。でも一つだけお願ひがあるんだ。「ありがとうのスタンプ」を押してもらえるかい？」

カメくんは喜んでスタンプを押してくれました。

この時、急け者のミツバチは初めて知りました。

1つ目のスタンプ「誰かに手を差し伸べると「ありがとう」をもらえる」

待ち合わせ場所に到着すると、不安げな表情を浮かべるサルくんがいました。

「サルくん、カメくんはあと20分ほどで到着するから心配いらないよ。」

急け者のミツバチのメッセージに安堵したサルくんは、大変喜びました。

「いつも時間厳守のカメくんが来ないから心配していたんだ。事故でもあったんじゃなかって。」

ミツバチは嬉しくなりました。

こんなちょっとしたことで喜んでもらえるなんて。

そしてちゃっかり「ありがとうのスタンプ」を押してもらいました。

ミツバチはこの時に知りました。

2つ目のスタンプ 「誰かに安心を与えると「ありがとう」をもらえる」

「ところでミツバチくん、僕のお願いを聞いてくれるかい？」

急にサルくんは真剣な表情になりました。

「実は大変言いにくい話なんだけど・・・。」

そう前置きした上でサルくんは身の上話を始めました。

それはこんなお話でした。

サルくんは10年前に遠く離れた田舎町を飛び出してきました。

長年サルくんはお母さんと二人暮らしをしていましたが、心配性なお母さんがとてもうとましく思えました。

いつも「ああしなさい」「こうしなさい」とうるさくて仕方がなかったのです。

そしてある日、サルくんは黙って家を飛び出してきたのでした。

「僕は何だってできるのさ。お母さんの言いなりにはなりたくない。」

そう思っていました。

でも、あの日から 10 年、サルくんには後悔の日々が続きました。
自分のことを大切に育てくれたお母さんを見捨てるなんて。

「これを渡してきてくれないかい？」
サルくんが差し出したのは一枚の写真でした。
それは子供のころのサルくんとお母さんが二人仲良く映っている写真。
「家を飛び出してからずっと大切に持っていたんだ。これをお母さんに渡してきてくれないかい？」

サルくんのお話に共感したミツバチは、お願いを聞くことにしました。
でもそれは遠く離れた田舎町。
ミツバチの羽で飛んでもかなりの距離でした。
それでも写真を受け取ったミツバチは後先も考えず、その田舎町へ行ってみることにしました。
毎日巣の奥の部屋に引きこもっていた彼にとっては、ちょっぴり冒険心がくすぐられる小さな旅でした。

サルくんのもとを飛び立ってからしばらくの時間がたちました。
遠く離れた田舎町まであと半分くらいのところまで来た時、ミツバチはある光景を目にしました。
アリくんたちが群れを成して大騒ぎをしていたのです。

急け者のミツバチは近くに飛び降りて一匹のアリくんに尋ねました。
「そんなに騒いで一体どうしたんだい？」
「もうすぐ冬が来るんだよ。そのために食料を集めなきゃならないのに、思うように作業が進まないのさ。これでは僕たちの大半はこの冬を越えられない。」
本当に困ったアリくんの表情を見て、ミツバチは言いました。
「よし、僕にできることはないかい？」

急け者のミツバチはアリくん達の列に加わり、収穫した食べ物を巣の中に入れる作業を手伝いました。
ミツバチの羽の威力は大変なもので、アリくんたちが探し当てた食べ物を次から次へと巣の中へ運ぶことができました。
時間は掛かりましたが、予想以上の量の食べ物を巣の中に運ぶことができたアリたちは、みんな揃ってお礼を言いました。

「君が仲間に加わってくれたおかげで、僕たち全員がこの冬を越えることができそうだよ。」

こうして、三つめの「ありがとうのスタンプ」を押してもらうことができました。
ミツバチはこの時に知りました。

3つ目のスタンプ 「誰かの仲間になると「ありがとう」をもらえる」

急け者のミツバチは先を急ぎました。

そしてとうとうサルくんの田舎町に到着しました。

サルくんのお母さんが住む家は、聞いていた通り、人気のない寂しい場所にありました。

ドキドキしながらドアをノックすると、大変機嫌の悪そうな老婆が現れました。

「あんた、こんな時間になんの用だい？セールスはお断りだよ！」

老婆はミツバチの姿を目になるとそんな言葉を吐き捨て、ドアをピシャリと閉めてしまいました。

なまけもののミツバチはドア越しに大きな声で老婆に言いました。

「セールスではありません。大切なものをお届けに参りました。」

「大切な物？そんなことを言いながら何かものを売りつけるんだろ！帰れたら
帰れ！」

老婆は少しも話を聞きそうにありませんでした。

困ったミツバチは、ドアの隙間から受け取った写真をスッとスライドさせて家にいれました。

老婆の頑なな態度を見て、いよいよあきらめて帰ることにしました。

夜もすっかり更けていましたから。

ミツバチが飛び立とうとした瞬間、家のドアがガチャっと勢いよく開きました。

そこには一枚の写真を手にした老婆が驚きの表情を浮かべてたたずんでいました。

「どうしてこの写真を？」

老婆は先ほどの不機嫌な様子とは打って変わって、とても優しい声でささやきました。

「あなたの息子さんから預かったものです。」

急け者のミツバチがそう伝えると、老婆はうれしそうに涙を浮かべました。

「あの子がこの写真を・・・。あの子はもう私のことなど忘れたのだと・・。」

「僕はあなたの息子さんから渡してほしいと頼まれたのです。彼がずっと大切にしていたその写真を。」

それを聞いた老婆はこらえきれず涙をこぼしました。

「あの子は私の大切な宝ものです。私の前から姿を消してしまいましたが、私の想いはずっと消えませんでした。なんとお礼を申していいのやら。夜も更けて参りましたので、今日はこのあら家にお泊り下さい。」

ミツバチは少し考えましたが、丁重にお断りし、その代わりに「ありがとうのスタンプ」を押してもらいました。

ミツバチはこの時に知りました。

4つ目のスタンプ 「誰かが大切にしているものを大切に扱ってあげると「ありがとう」をもらえる。」

急け者のミツバチは家路を急ぎました。

夜なかの深い森の中を一人きりで飛んでいると、とても不安な気持ちになりました。

そして自分がお母さんや仲間たちに守られた中で生活していることがよく分かりました。

やっとの思いで蜂の巣に戻ると、長老バチが帰りを迎えてくれました。

「申し訳ありません。「ありがとうのスタンプ」は4つしか手に入れられませんでした。」

長老バチの顔を見るやいなや、急け者のミツバチは大きく頭を下げました。

「あきらめるのは早いぞ。ほら。」

長老バチが指差した先には、息子の帰宅に安どしたお母さんバチの姿がありました。

ミツバチはお母さんバチに近づくと、こう言いました。

「お母さん、ごめんなさい。

遅くなって心配させたこと、そしてこれまでの僕の情けない姿に。

「誰かに手を差し伸べる」こと、

「誰かに安心を与える」こと、

「誰かの仲間になる」こと、

そして「誰かが大切にしているものを尊重する」ことも、これまでの僕には全てが足りていなかったんだ。」

お母さんバチは一回り大きくなった息子に頬もしさを感じながら、最大級の笑顔で彼を抱きしめました。

「スタンプを貸しなさい」というと、お母さんバチは5つ目の「ありがとうのスタンプ」を押してあげました。

急け者のミツバチはそれをみるとジャンプして喜びを表しました。

そしてミツバチはこの時に知ったのです。

5つ目のスタンプ「誰かを笑顔になると「ありがとう」をもらえる」

その日から心を入れ替えた急け者のミツバチは、それ以降「この巣一番の急け者」と呼ばれることはなくなりました。

この巣一番の「働きバチ」に変わったのだそうです。

おしまい

急け者のミツバチは最初「引きこもり」でした。

心に闇を抱えていました。

自分がなんのために生きているのかを見失っていたからです。

でも、長老バチから「ありがとうのスタンプを集めてきてくれ」と頼まれごとを与えられると、急け者のミツバチは蜂の巣から飛び出さざるを得ませんでした。

なぜなら「ありがとう」は他者との関わりによって生じるものだからです。

このお話には次のメッセージが隠されているようです。

① 「引きこもり」や「心の病」は、自分自身の「価値」が見いだせなくなった時に起こる悲劇であるのかもしれません。

②あまりにも「ありがとう」と言われない人生を送っていると、人は自信を失うのかもしれません。

③ただ、これまで「ありがとう」と言われない人生を送ってきたので、どうしたら「ありがとう」と言われるのかが、あまりよく分からぬのかもしれません。

④ 「ありがとう」を受け取るには、いくらかの経験が必要なのかもしれません。

その経験は、ふつう、他人からの頼まれごとから生じることが多いのですが、若い人たちや経験不足の人たちは、それがよく分からぬのかもしれません。

⑤ 「ありがとう」は至る所に存在します。でもそのありがが分からぬのかもしれません。

⑥ 「ありがとう」はこんなところから出てくるかもしれません。

1つ目 「誰かに手を差し伸べると「ありがとう」をもらえる」

2つ目 「誰かに安心を与えると「ありがとう」をもらえる」

3つ目 「誰かの仲間になると「ありがとう」をもらえる」

4つ目 「誰かが大切にしているものを大切に扱ってあげると、

「ありがとう」をもらえる」

5つ目 「誰かを笑顔にすると「ありがとう」をもらえる」

⑦ そして「ありがとう」を集めると、「生きる」ことが今よりずっと楽しくなるのかもしれません。

僕の人生にいったい「ありがとう」はいくつあったのだろうか？

時々、そんな「人生の棚卸」をしてみます。

結局、人生とは「ありがとう」を地道に集め続ける旅路なのではないだろうか、

そんな風に思うのです。

多くの「ありがとう」を投げかけること、そして多くの「ありがとう」を受け取ること、これが僕たちの人生を、より面白いものにしてくれるのです。

あなたは言っていましたね。

「ひょっとして、私は人に迷惑をかけるために生まれてきたの？」

これだけは、はっきりさせておきましょう。

あなたの人生は、人様に迷惑をかけるためのものではありません。

「ありがとう」を人様に投げかける多くのチャンスを頂いた人生なのです。

あなたには、精一杯そのチャンスを活かす人生を送ってほしいと願っています。

たくさんの人たちに「ありがとう」を投げかける人生って素敵じゃないですか！

絵本作家からのメッセージその7

「幸せ」＝「あなたの目の前で起こること」×「感謝（ありがとう）」です！

「感謝」すれば「拡大」する！

15. 「哀しみ」を癒す8つ目の童話・・・「真夏のマフラー」

HEさんへ

いよいよお別れのときが近づいてきた。

そんな感じです。

お母さんからの指示なのか、家族も病院の先生も、そしてこのメッセージを代筆してくれている舞さんも、私に正式な病名を教えてはくれません。

でも、インターネットが発達したこの時代、私がいる病棟や受けている治療を考えれば、誰だって想像はできます。

HEさんとの「魂の展開」は、私の人生にとって、とても価値あるものだったと確信しています。

HEさんが私のために書いてくれた童話の数々は、私に「気づき」と同時に「安ど」をも与えてくれました。

余命幾ばくも無い私の命に、最後の明かりを照らしてくれたのです。

本当にありがとうございました。

今の私は、ちょうど夕日を眺めている心境です。

生きていられることの素晴らしさに、うつとりとしている私がいます。

でも、もうすぐ沈みゆく運命にあることも知っています。

さて、いよいよ8つ目のお話ですが、最後はHEさんから私へのメッセージをお願いします。

死にゆく者へのメッセージです。

これが「最後のお題」です。

HEさん、本当にありがとうございました。

そして、さようなら。

Mより

「天使」が病室の窓に舞い降りてきた。

美咲に代わって舞が「天使」の足に最後のメッセージを括り付けた。

舞は、HE から来る最後の童話が「どうか間に合うように！」と祈った。

するとその気持ちを見透かしたように、翌日同じ時間に「天使」は病室の窓に姿を現した。

舞が括り付けられたメッセージを外している間、「天使」はじっと美咲を見つめていた。
いまやベッドから上半身さえ体を起こすことができなくなった美咲は、精一杯の笑顔を作って、「天使」にお礼を言った。

「ありがとう、私の天使さん・・・」

その言葉を聞きとると、「天使」は「クルックー」とひと鳴きして、再び青空に飛び去っていった。

Mさんへ

最後の「お題」をありがとう。

僕もあなたとの「魂の展開」を十分に堪能させてもらいました。

この「怪しい絵本作家」の書いた童話を真剣に読んでくれたことに感謝しています。

本当にありがとうございました。

あなたへ捧げる8つ目の童話をどうぞお読みください。

第8話 「真夏のマフラー」のお話

コグマくんのクラスに一見変わった転校生がやってきました。

真夏だと言うのに真っ赤なマフラーをしているのです。

でも、不思議なことに先生はそれに触れることなく転校生をみんなに紹介しました。

「はい、みなさん。今日から新しいお友達が増えることになりました。よろしくね。」

その転校生は恥ずかしそうに頭をペコリと下げるだけでした。

お昼休みになるとクラスのみんなが集まってその転校生のマフラーの話をしました。

「おい、あいつなんで真夏なのにマフラーしてんだよ。」

「きっと風邪ひいて寒いんじゃないかな？」

「でもあいつ額から汗が流れてるよ。」

「オシャレなんじゃないかな？」

「それならスカーフとかにするだろう」

「きっと赤色が好きなんだよ」

「それなら赤色とかのTシャツ着てくるだろ。」

「やっぱ、真夏にマフラーなんておかしいよなあ」

みんなの声が聞こえているのかいないのか、転校生はひとり静かに席に座っていました。

噂話が飛び交う中、ずっと黙っていたコグマくんは勇気を振り絞って転校生に近づいていきました。

「ねえ、君。どうして真夏なのにマフラーなんてしてるんだい？暑くないかい？」

転校生は頭をあげてコグマくんを見つめると、その真っ赤なマフラーの中から一枚の紙を取り出しました。

コグマくんはそれを黙って受け取ると、声を出さずに読み始めました。

「わたしのかわいい子

悲しまないでちょうどいいね。泣かないでちょうどいいね。

ママは悲しみの世界に旅立つわけではないのだからね。

あなたからは見えなくなってしまうけれど、ママはあなたをずっと見守っているのよ。

振り返ると、ママの人生は何か特別なものがあったわけじゃない。

誰かに誇れる何かがあったわけじゃない。

ママが歩んだ道のりは大空に描かれたひとすじの飛行機雲みたいなもの。

少し時間がたつたら、跡形もなく青空に包まれてなくなってしまうような些細なもの。

でも、そんなママにも一つだけ自慢できるものがあるのよ。
それはあなたがママのもとに生まれてきてくれたこと。
あなたはママの人生に色彩をあたえてくれた。
ママの人生をカラフルにしてくれた、そう思っている。

これからはおばさんの言うことをしっかりと聞いてちょうだいね。
おばさんにはあなたがピーマン嫌いだってこと伝えておいたわ。
でも、「しっかり食べさせてちょうだいね」とも伝えておいたわ。(笑)
だから食べてちょうだいね。

あなたはしっかり者だからママは何も心配していないの。
あなたにはパパがいなかったけど、ママの前では一度もその言葉を口にしなかった。
あなたはいつもママの気持ちを知っていたのよね。
冬の寒い日だってママの前では「寒くない」って言ってたわね。
でもあなたの手を握ったとき、その小さな、小さなこぶしはキンキンに冷えきていたわね。
ママはなんだってあなたのことを知っています。

新しい学校ではお友達ができるかしら。
あなたは「口べた」だから、「友達になってよ」ってきっと言えないだろうから、ママはとっておきの作戦を考えたのよ。

ママがこの冬、ずっと編んでいた赤いマフラー。
あなたのことをずっと思いながら編んだ赤いマフラー。
初めて学校に行く日、このマフラーをしていきなさい。
暑くてもこのマフラーを巻いていきなさい。
決して外してはいけないわよ。

そしてクラスで初めにあなたに話しかけてくれた子、その子にこの手紙をお見せなさい。
その子があなたの初めてのお友達になってくれる子だから。
心優しいお友達だから。
きっとあなたの親友になってくれる。

ね？ ママの作戦、最高でしょ？
幸運を祈っているわ。

私のかわいい子
私の希望
私の夢
私のすべて
そして私の幸せ
今は、あなたに出会えたことを神様に感謝しています。

始まりがあれば、終わりがある
出会いがあれば、別れがある
別れがあれば、また新たな出会いがある

勇気ある一步を踏み出せば、あなたは宝物を見つけるでしょう。
あなたの幸せをいつまでもいつまでも祈っています。
ママより 」

コグマくんはその手紙を静かに閉じると、転校生が初めて口を開きました。
その声はやっとコグマくんの耳に届くくらいの小さな震える声でした。

「と、友達になってくれるかい？」

コグマくんはその紙を転校生に返すと、彼の手を握ってこう答えました。

「もちろんさ！ ほらクラスのみんなを紹介するよ！」

大空に広がったひとすじの飛行機雲が静かに消えていきました。

おしまい

今のあなたの病状にそって、この物語を書くことに正直ためらいを感じました。

「死」というものを身近に感じている若いあなたに、「死」を前提としたお話を書いていいものかと・・・。

でも、あなたに伝えておこうと決意したことがあります。
今まで誰にも話してこなかったことなのです。
この事実は、私の心をずっと苦しめ続けてきた深い悲しみに関わることです。

実は、私には娘がいました。
私たち夫婦にとって、かけがえのないとても美しい娘でした。
真っ赤なワンピースとママのことが大好きな、どこにでもいるごく普通の女の子でしたが、僕たち夫婦にとっては、それはそれは大切な宝物でした。

娘には生まれつきもった欠陥がありました。
その詳細については省きますが、その事実を医者から伝えられた僕たちの衝撃は、口にはあらわせない悲しみでした。

特に彼女を産んだ妻にとっては、身を割くほどの痛みと苦しみでした。
自責の念に駆られ、自らの体に傷をつけるような精神状態になり、やがてそれは深刻な病に発展しました。

そんな精神状態にあっても、妻は娘を守ろうと必死でした。
ただ、その必死さが娘にとって良かったのかどうか、僕には分かりません。

娘は清潔な状況に身を置かなければならぬ病でした。
だから妻は異常なまでに彼女を清潔に保とうと試みました。
でも、それは明らかに度を越えていきました。
娘の手が赤く膨れ上がるほど手を洗わせたり、お風呂に入れば、ヒリヒリして痛くて泣くほど体を洗ったり、ひどい時にはアルコールで娘の全身を消毒したりしました。

僕も始めのうちは、妻の行き過ぎの行動を注意していましたが、
「あなたは娘のために何ができるのよ！」
と妻に罵倒されると、無力な自分を責めるようになっていきました。

そして、徐々に妻と娘と距離を取り始めたのです。
仕事だと称して、家を空けるようになりました。

そう、僕は自身の弱さゆえに、妻と娘を見捨てたのです。

やがて娘の病は進行し、明らかに衰弱していきました。

そして入院したころには、すでに「死」を受け入れざるを得ない状況となっていました。

そんな状況でも、妻は我が娘を救おうと必死でした。

その必死さゆえに、ドクターや看護師さんと衝突することも度々ありました。

他の病院を探すため、日帰りで北海道や九州まで足を運んだりしました。

僕はその間も何もできませんでした。

何もできないというよりも、弱っていく娘、狂乱していく妻を見るのが怖く、遠くで黙って事の成り行きを見ているだけでした。

そしてその結果、僕は二人を同時に失いました。

自業自得です。

僕は何もしなかったのですから。

何かをしたら状況は変わったかと言えば、そうはならなかっただでしょう。

娘の病気も、妻の狂気した言動もなにも変わらなかっただことでしょう。

でも僕がいま、心から悔やんでいるのは、自分ができることを何一つ実行しなかったことです。

できることを、できる時にしなかったこと。

生きている娘と妻に手を差し伸べなかつたこと。

あの時に、妻と娘に僕の「想い」をぶつけようとしなかつたこと。

そして、そんな失敗をあなたには犯してほしくないです。

生きるとは、「その瞬間」に「想い馳せる」ことなのだと思う。

過去を憂い、未来に希望を抱くことではなく、「今」、「目の前にいる人」「目の前にある現実」に全身全霊の「想い」をぶつけていくことなのだと思う。

子供たちが絵本を読んでいる時、彼らは今読んでいるページを堪能しています。

目をキラキラと輝かせながら、今、目の前にあるページを楽しんでいます。

彼らの想いという名の意志は、過ぎ去ったページでも、これからめくるページでもなく、今、目の前にあるページに存在するのです。

「生きる」とはそういうことなのです。

僕たちができること、それはたった一つしかないのです。

「今、この瞬間に想いを込めて生きること！」

これしかないのですから、時間はだれにも平等に存在しているのです。

人生は、「長い」とか「短い」という尺度では測れません。

人生とは「想い」なのです。

あなたとの対話が進行していくにしたがって、僕のお友達（伝書鳩）が何故あなたと僕を引き合わせたのかが分かったのです。

以前あなたにお伝えしたと思いますが、そのお友達が僕の眼前に現れるのは、彼が「特別な事情を抱えた子供」を見つけてきた時だけです。

そして僕にその子供の「魂の展開」を迫ってくるのです。

僕にそのような特別な才能があるとは思えないのですが、僕がつむぎだす8つの物語にはどうやらその力があるみたいなのです。

だから、最初お友達からあなたのことを探らされた時、ぼくはいつも通り、あなたの「魂の展開」を図ることだけに注力していました。

でも、あなたとの対話が進み、何作かの童話を書いているうちに、なんとも言えぬ感情が僕自身にも湧き上がってきたのです。

まだ娘が生きていたなら、あなたと同じような悩みや苦しみを味わっていたのだろうか。

そんな風に思うようになったのです。

あなたと同じように親や友達との悩みを抱えたり、人生の不条理さに胸を痛めたり、また人知れず恋をしてみたり・・・。

あなたの心の葛藤を思い浮かべながら8つの童話を書きましたが、それはあなたに語り掛けながら、そして一方では、僕の目の前に娘がいて、父親として、人生の先輩として、できる限り精一杯のエールを送ったつもりなのです。

僕は結局、娘にとって立派な親にはなれませんでした。

でもあなたとの対話を通して、すこしばかりの「つぐない」をしている自分にも気が付いたのです。

そして、欠けていたピースが一つ、また一つと埋まっていくように、僕の心は穏やかさを取り戻

していったのです。

だから「魂の展開」は、あなただけに起こったのではないです。

実は、僕にも起きていたのです。

それこそ、あの伝書鳩が僕とあなたを結び付けた「真実」なのだと思います。

あなたは今のご自分の心境を「夕日を眺めている」と表現しました。

人生とは美しくも、それほどまでに儂い（はかない）ものなのかもしれません。

でも、僕は人生とは夜空に浮かぶ星だと思っています

決して重なり合うことがない無数の星たち

自らのチカラで光を放っている星たち

そして、その一つがあなたなのです

星は、消えゆく運命を嘆いたりはしないでしょう

星は、今輝くことだけに想いを馳せているのです

そして、それがあなたなのです。

HE より

P S : HE (彼) だなんて、きざなペニネームと思われたかもしれませんね。

正直に言ってしまうと、実は名前のイニシャルなのです。

僕の名は「原田 (H) 衛星 (E)」と申します。

絵本作家からの最後のメッセージその8

今、目の前にあるページにある。過ぎ去ったページにも、これからめくるページにもない。

この一瞬に想いを込める！

16. お母さんとの和解・・・そして別れ

いよいよ、最期の時が来た。

遠く、遠くのほうから小さな、小さな声が聞こえる。

何か叫んでいるみたいだ。

よく耳を澄ませてみる。

「美咲、逝かないで。お願ひよ、美咲」

お母さんの声だ！

その瞬間、美咲は奇跡的に意識を取り戻した。

家族が全員そろっていた。

担当医と舞もいた。

「お母さん、どうしたの？」

美咲はかすかな声で尋ねた。

その弱々しい声はお母さんの耳には届かないみたいで、必死に美咲の口元に耳を近づけていた。

家族の顔が見えてきた。

弟の優太が、流れ出る涙を服の袖で何度も何度もふき取っていた。

優太は美咲にとって大切な弟だった。

姉弟げんかもたくさんしたけれど、パパにそっくりなクリクリした大きな瞳は、美咲をいつも癒してくれた。

「ごめんね、あなたを一人ぼっちにして。お姉ちゃんを許してね。」

美咲は声にならない声で、優太につぶやいた。

おじさんは、笑顔で美咲の顔をのぞき込んでいた。

でも、おじさんの顔も涙でグチャグチャだった。

笑っているのに涙がでるなんて不思議だなあ、と美咲は思った。

お母さんは、必死に美咲に話しかけていた。

「美咲、逝かないでよ。お願ひよ、お母さんをおいて逝かないでよ。」

お母さんも、涙で顔をグチャグチャにして必死に叫んでいた。

「あ、涙…」

美咲は、お母さんの涙を生まれて初めて目についた。
パパが死んでしまった時だって泣かなかったのに・・・。
どうして、今、お母さんは泣いているのだろう・・・。

お母さんの両手は、美咲の体を一生懸命ゆすっているようだったが、美咲にはすでにその感覚は無かった。

「美咲、美咲、死なないでよ！美咲！」
お母さんは、ずっと娘の名前を呼び続けていた。
でも、不思議とうるさくなかった。
あんなにもお母さんの金切り声が耳障りでしかたがなかったのに・・・。
今は、むしろ心地良いくらいだった。

「お母さん、私、生まれても良かったのかなあ？」
美咲は渾身の一言を口にした。
声量こそなかったが、どうやらお母さんの耳には届いたみたいだった。
お母さんは、一瞬ハッとした表情を浮かべた。
そしてじっくりと間をあけて、落ち着きを取り戻すよう努めていた。
大きく一息をつくと、美咲の耳元でポツリポツリと語り始めた。

「パパが亡くなってから、あなただけが頼りだったよ。
家のことも一生懸命手伝ってくれたね。
弟の優太の面倒もよく見てくれたね。

時々考えるよ、あなたが居てくれなかつたら、お母さんは、今頃どうなっていたのかなって。

ただ、お母さん、美咲に謝らなくっちゃね。
パパが亡くなつてから、あなたに厳しくしたこと、あなたに辛くあたつてしまつたことも、
そして苦しめたり、悲しませたり。

あなたをしっかり育てなくては・・・。
いつも自分にそう言い聞かせていたの。
それがパパからの最後のお願いだったから。

パパが死んだ時、私は誓つたの。

この世に神も仏もないのなら、私があなたと優太を守る！と。
だから泣いてたまるかってね。

でも結果として、それがあなたを苦しめたのね。
すべては、お母さんが未熟だったから。
あなたはいつも正しかったわ。
でも、なかなか謝れなくてね、ここまで来てしまった。
本当にごめんなさい。」

お母さんは、美咲の手をつよく握りしめた。
美咲の手は、すでに感覚を失っていたが、母の温もりを感じた。
幼いころお母さんの腕に抱かれて眠るのが、なによりも幸せだったことを思い出していた。

私はやっぱりこのお母さんのが大好きだったんだ！
そう思った瞬間、お母さんを許したはずなのに、自分も許されたような不思議な安どを覚えた。

そして、いよいよその時がやってきた。

「私、怖くないよ。だって私には「天使」がついているんだもの。ほらね。」
弱々しく痩せた手で握りしめていたのは、純白の1本の羽だった。

傍らで様子を見守っていた舞はそれを見て思わず息をのんだ。
「あの時の羽だ！」
美咲はずっと「天使の羽」を大切に持っていたのだ。

「泣かないで。「天使」がお迎えにきてくれたから。私、行くね。」
美咲は、すでに声にならない声で精一杯、力の限り伝えた。

お母さんはもう一度、娘の手を力いっぱい両手で握りしめた。
そして覚悟を決めた。

「行きなさい。もうこれ以上苦しむ必要はないからね。あなたは立派だった。
私の自慢の娘。たったひとりの娘。」

美咲のまぶたが静かに閉じていった。

お母さんは、娘の体からチカラが徐々に抜けていくのを感じていた。

そして完全に脱力した。

お母さんは、ふと美咲の左手に目をやった。

「天使の羽」がしっかりと握りしめられている。

力強いその握りこぶしを目にした瞬間、娘が希望の光に向かって旅立つたのだと理解した。

「天使の羽」は、残された者達のその悲しみをも癒しているようだった。

終わり